別れのKiss -そして再び-

桜馨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
別れのＫｉｓｓ　―そして再び―

【Ｎコード】
Ｎ１４５５Ｆ

【作者名】
桜馨

【あらすじ】
ある小さな島、桜花島（おうかじま）で主人公、龍輔（りゅうすけ）は綺香（あやか）姉妹と小さい頃から仲がよく兄弟のように共に成長した。しかし龍輔は気づいていないが二人を意識し始める・・・

第一話　恋の始まり（前書き）

ここは桜花島（おうかじま）
この島に一本だけ決して枯れる事の無い桜、『枯れない桜』がある
この桜に願いをするとその願いは叶われると言う
その枯れない桜が見守るなか、切ない恋の物語が始まる・・・

第一話　恋の始まり

俺の名前は森堂龍輔（しんどりゅうすけ）
中学三年だ
俺は小さな頃に親を亡くしている
だからずっと一人暮らしだ
それ以外はどこにでもいる普通の中学生だ

俺が通ってる学校は中高一環の学校だ
「リュウー！」
「弟君！」
「ん？あぁ、雪紀（ゆき）に椛（もみじ）か」
「おはよ、リュウ」
「おはよう」
「あぁ、おはよう」
こいつは綺香（あやか）雪紀　中学二年
二番目のが綺香椛　高校二年
俺の家の隣（となり）に住んでいる
俺らは小さい頃から仲が良い
だから雪紀は妹のように、椛は姉のように思っている
「うぅ～・・・最近寒くなってきたね～」
「そりゃもう１０月だからな」
「そだね」
・・・
「ねぇ、弟君」
「ん？」
「今日はお弁当持ってきた？」
「・・・」
俺はバッグの中を探ってみた

「・・・忘れた」
「また？」
俺は軽く頷(うなず)いた
椛め、またとか言いやがって
そう言えば弁当作った覚えもねぇ・・・・
「私先に行くね。じゃね」
そう言って椛は走り去った・・・
あいつは結局何が言いたかったんだ・・・・？
「どうするの？お昼」
「購買かな・・・」
と言いながらポケットを探る
・・・が
「・・・財布・・・忘れた・・・」
「あーあ」
あーあじゃねぇよ
「昼は我慢すっかな・・・」
「・・・お弁当半分分けようか？」
・・・？
「なんで？」
「なんでって・・・お昼ないんでしょ？」
「あぁ・・・でもお前は弁当足りんのか？」
「今日はちょっと作りすぎちゃって」
めずらしいな・・・
いつもはきちんと作ってくるのに・・・
「で、どうするの？」
どうするのって・・・
「やっぱいいわ。今日は我慢する」
「・・・そう」
？・・・なんだ？
「リュウはいつもどこでお昼食べてるの？」

「ん？あぁ、屋上だけど・・・それが？」
「ううん、別に。じゃね、また後で」
「あぁ・・・」
？後で・・・？
「・・・ま、気にする必要も無いだろ」
俺は気にしないことにした

午前の授業が終わり、その日の昼休み
「誰もいないな・・・」
俺は屋上へとやってきた
「・・・やっぱここが一番落ち着く」
そして屋上の誰にも邪魔されなさそうな所に寝転がった
「ｚｚｚ・・・」
数分後・・・
『ガチャッ』
「？」
俺はドアの開く音で目を覚ました
「誰だ？」
起き上がるとドアの近くに雪紀がいた
「雪紀？」
「あ、いたいた。リュウ、探したよ」
「どうしたんだ？」
「お弁当分けてあげようと思って」
「弁当？」
雪紀に手の中にはやや大きめの弁当箱があった
「いらねぇって言ったじゃねぇか」
「でも食べておかないと午後の授業に集中できないよ？お昼ご飯が午後の・・・」
あ～・・・なんかうっさくなりそうだ・・・
「わかった、食うよ。・・・その蓋貸してくれ」

「はい」
その蓋に雪紀の弁当から3分の1のそれを入れた
「ん。これだけもらう」
「あ、うん」
「いただきます」
俺はたまたま持っていた割り箸でそれを食った
「ごちそうさま」
空になった蓋を雪紀に渡し再び眠ろうとした
「・・・どうだった？」
いきなり雪紀が質問してきた
「何が・・・？」
「あ、いや・・・あの・・・そ、そのお弁当・・・」
なぜ顔を赤くするんだ・・・？
「美味かったけど・・・？」
「そ、そう・・・よかった」
変な奴だな・・・
「じゃ、そろそろ教室戻るか・・・」
「え？もうそんな時間？」
「あぁ、そうだけど。・・・俺先行くな」
「あ、うん」

午後の授業が終わり放課後、音楽室
「よ。来たぞ」
「龍輔遅いよ」
こっちは槻嶋美奈
軽音楽部でベースを担当している
「やっほー。龍輔君」
この元気な奴は白河恵美
歌声が奇麗で軽音楽部でボーカルを担当している
「ん？お、森堂か。相変わらず眠そうな顔だな」

「相変わらずは余計だ」
「悪い悪い」
こいつは瑞嶋滝太(みずしま そうた)
ドラムが好きで軽音楽部に所属している
いつもテンションの高い元気な奴
美奈や恵美等(ら)とバンドを組んでる
俺もこの部でギター担当でバンドの仲間だ
「それじゃ今日もまた通し練習な」

練習終了後
「よし。じゃあ今日は解散」
「じゃな」
「またねー龍輔君」
・・・なぜ君をつけるんだ？

学校を出るとそこに雪紀がいた
「どうしたんだ？雪紀」
「え！？あ、いや、その・・・」
なんかドギマギしてんな・・・
「リュ、リュウが一人で帰るんじゃ寂しいかなと思って・・・」
「思って？」
「い、一緒に帰ってあげようかなって待ってたの！」
「ふーん」
「ふーんって・・・」
「じゃ、帰るか」
「え？あ、う、うん・・・」
・・・変な奴
「ふぁ～っ」
「眠いの？」
「いつのも事だろ？」

「確かに・・・」

しばらく何の会話も無く帰路を歩いた

ジ〜〜〜ッ

「な・・・何？わ、私の顔に何か付いてるの？」

「ん？あ、いや・・・なんかいつもと様子が違うな〜と思って」

「どこが？」

どこがって・・・

「いつも元気で明るいのに今は何て言うか・・・静かで大人しいな〜って」

「そう？」

「あぁ・・・なんか悩み事とかでもあるのか？」

「え？別ないけど・・・」

「じゃあ気のせいか・・・」

「？」

自宅に着き俺は着替えて下へ降りた

「なんだ、二人とも来てたのか」

台所へ行くとそこには綺香姉妹がいた

しかし不思議ではない

なぜなら毎日二人は家(うち)に来てたまに料理をして夕飯を食べていくからだ

「あ、リュウ」

「おじゃましてます、弟君。今日はホワイトシチューね」

「・・・なぁ椛、そろそろ弟君って俺の事呼ぶのやめないか？」

「なんで？」

「なんでって・・・それは俺の名前じゃねぇし、恥(は)ずかしいからだ」

「そう・・・じゃあ今度からリュウ君って呼ぶね」

「・・・」

なんかあんまり変わらない気がする・・・

「俺向こうにいるから」
「うん」

しばらくして夕飯の準備が出来た
「いただきます」
俺はシチューを一口食べて何か視線に気づいた
「・・・な、何？」
「どう？おいしい？」
「あ、あぁ・・・うまいけど・・・」
「よかった」
「？」

「ごちそうさま」
「じゃあ私たち食器を片付けて家に帰るね」
「いいよ。片付けは俺がやる」
「・・・うん、ありがとう」
・・・何がありがとうなんだ？
「じゃな、おやすみ」
「おやすみなさい」
「・・・さて片付けっかな」
二人を家へ帰して俺は食器の片づけを始めた

そして俺の心はなぜかドキドキしていた
その時は気づかなかったが俺は何かを意識し始めていた・・・

第一話　終わり

第二話　成功への祈り

『はい、今日からここが君の家だよ』
『ぁ・・・』
『・・・』
『えっと・・・森堂龍輔です。・・・よろしく』
『・・・』
『あはは・・・』
『私、雪紀』
『え？』
『綺香雪紀。よろしくね』
『・・・』
『さ、入って』
『あ、えっと・・・おじゃま、します』
『ううん、違うよ』
『え・・・？』
『ただいまだよ。ここはお兄ちゃんも一緒に住む所だから』・・・

・・・夢？
今のは・・・小さい頃の俺と雪紀・・・
俺が始めて綺香家に行った日そして優しさを知った日だった
・・・懐かしいな
「おっはよー。龍輔君」
「さ、桜さん！？」
「あれー？まだ寝てた？」
この人は楓花桜さん
とっても明るい人だ
自分のことを『僕』と呼ぶ
俺を初めて家族として受け入れてくれた

そして俺に優しさと言うものを教えてくれた人
「数分前に起きたところで・・・」
「ふーん。あ、そうだ。・・・ハイこれ」
「？コーヒー？」
「うん、僕のおごりだよ」
「ありがとうございます」
「じゃね。登校にも気をつけて」
「はい」
・・・優しいな、桜さんは
俺だけでなく皆にも・・・
そして・・・強い心を持っているな

朝のホームルーム
「はい、静かにしなさい！」
こいつは学級委員長の麻河眞由美
真面目で面白みのないつまらない奴
「えぇ、もうすぐハロウィンパーティです。」
またその話か・・・
「二週間前から話している事ですが何も案などが出ていません。何か案がある人は？」
「はい！」
「瑞嶋君。何か案でも？」
「ハロウィンといえばお化け屋敷っしょ」
「他には？」
「はい」
「河野さん」
「お化け屋敷なんてつまらないわ」
こいつは河野美穂
俺に綺香姉妹と何か進展はあったかなどと聞いてくる謎の多い奴
「ハロウィンに関する劇のような事はどう？」

「劇？」
「えぇ、台本はいつでも書けるわ」
「えぇ・・・じゃあ、お化け屋敷と劇で多数決をします」

「森堂君！」
「イッ・・・！」
俺はいつの間にか寝てたらしい
頬杖をした手から頭が滑り落ちて机に思いっきり頭をぶつけた
「森堂君。ハロウィンに何をするか、あなたが決めてくれないと準備が出来ないわ」
「へ？」
黒板を見るとお化け屋敷１４劇１４に分かれていた
「・・・俺が最後か」
俺が決めたものは

「はい、そこ！サボらない！」
「へーい」
「それにしてもお前がお化け屋敷を選ぶとはな」
そう、俺が選んだのは瑞島の提案したお化け屋敷だ
「ん？あぁ」
「なぁ、何でお化け屋敷にしたんだ？」
「理由はねぇよ。ただ何となくだ」
「何だよつまんねぇ」
俺に何を求めてんだ？こいつは・・・
「じゃあ聞くがお前は何でお化け屋敷を提案したんだ？」
「それは女の子と一緒に入って脅(おど)かして俺にギュッてしがみつかせるという作戦さ」
「ならその作戦は失敗だな」
「な、何でだよ」
「理由は一つだ。お前はこのお化け屋敷の主催者(しゅさいしゃ)。だからお前は客

としてここに来るのは無理だ」
「ガーン！！」
落ち込み方が古いな
「そこまで考えてなかった・・・」
「お前の頭にはバンドの事しかないもんな」
「あぁ・・・」
図星か・・・
「あ、そうだ。俺な、お化け屋敷の事で提案があるんだ」
「ん？何だ？」
「お化け屋敷で希望した人にガイドがつけられるっていうものだ」
「ガイドって案内人か？」
「あぁ。そのガイドになった奴は客を怖がらせる役になるんだ」
「なるほど・・・いいな、それ！」
なんか・・・いきなり元気に・・・
「んでガイドは誰がなるんだ？」
「あ？なりたい奴にさせるんだ」
「じゃあ、俺ガイドする！」
・・・作戦って言ってた事する気か・・・
「あ、言っとくけど俺もするぞ。ガイド」
「え？何でだよ。！まさかお前も・・・！？」
「ちげぇよ。客観的に見て何か足りない物がないかとかって見るんだ」
「あ～、なるほど」
「足りないのがあったらここにあるもの使って補(おぎな)えられるしな」
「よし！気合入れていこ～！！」
こいつ馬鹿か・・・

森堂家にて
「こんばんわ～」
「おぉ、二人とも来たか」

「今日はリュウが作ってくれるの？」
「あぁ、昨日は二人に作ってもらったからな。そのお返しだ」
「じゃあ私は向こうにいるね♪」
「あぁ」
そう言って雪紀はリビングの方へ行った
「私は手伝うわ」
「じゃあそっちで中華スープを作ってくれ」
「ちゅ、中華！？」
「あぁ。今日の晩ご飯は中華にしようと思って」
「中華なんて作れるの？」
中華なんてって・・・
「まぁ、な」
「すごい」
「それはいいからスープ」
「あ、はーい」
子供みたいだ・・・

数十分後
「お腹すいた～」
「はいはい、今出来たから」
そう言って俺はテーブルに晩ご飯（チャーハン、中華スープ、シュウマイ、そして青椒肉絲（チンジャオロウスー））を並べた
「ヤッホー！たっだいま～！」
「あ、桜さん」
「雪紀ちゃんに椛ちゃん。いらっしゃい。あれ？これから夜ご飯？」
「はい。桜さんの分もありますよ」
「あ、ありがとう」
桜さんはいつものように明るく答えた
「あれ？龍輔君のは？」
「あ、本当だ。リュウの分がない」

「ん？あぁ、俺のはこれから作るよ。今そんなに腹減ってないんだ」
そう言いながら俺は台所へ向かった
「リュウ君どうしたの？」
「リュウはあんまりおなか減ってないからこれから自分の分を作るんだって」
「そう。さ、温かいうちに食べましょ」
「うん。そうだね」
「じゃ、いただきます」
「・・・おいしい！」
「本当！どうやって作ったのかしら」
「リュウの料理ならいくらでも食べれるかも！」
三人はそれぞれ賛美（さんび）の声をあげた
「へへっ・・・さて俺の分でも作るか」

「なぁ。みんなデザート食うか？」
俺は自分の晩ご飯を食べながら聞いた
「デザート？何作るの？」
「うーん・・・何作るか」
「か、考えてなかったの？」
「あぁ。食いながら考えようと思ったけど・・・」
「けど？」
「そう言えば俺菓子なんて作る機会が無かったからどうしようかなぁって思って」
「作れないの？」
みんなデザート食いたいんだ・・・
女の子だもんな・・・
デザートは別腹か・・・
「何とかするよ。何食いたいんだ？」
「私、ケーキ」
「私はクッキー」

「僕は和菓子がいいな」
うわ～
みんな時間のかかるやつ頼むんだなぁ～
「それぞれ時間かかるけど？」
「待ってるから」
「・・・わかった」
俺は台所へ向かい調理を始めた

約一時間後
「おまたせ。出来たぞ」
俺が戻ってきたらみんな待ちくたびれた様子だった
「雪紀にはプチケーキ」
「すごい！お店で売ってるカップケーキみたい！」
「椛はクッキー」
「私の好きなチョコクッキーじゃない！うれしい！」
「桜さんは和菓子（練切（ねりきり））」
「ありがとう。龍輔君」
喜んでくれて良かった
「飲み物は？」
「私、紅茶」
「私も」
「僕は温かいお茶」
「そう言うと思った」
あらかじめ用意してきてよかった
「はいよ」
「じゃあ、いただきます」
「どうぞ」
「ん～！やっぱおいしい」
「・・・」
俺はうつむいていた

「どうしたの？」
「ん？え？な、何？」
「リュウ君寝てた？」
「あ、あぁ。ごめん」
あぁ～眠(ねむ)ぃ
「そう言えば、龍輔君今度のハロウィンは何するの？」
「リュウはお化け屋敷だよね」
「情報が早いな。誰から聞いた？」
「菜(なみ)美さんから」
多岐澤(たきざわ)菜美
同じクラスメート
あいつはおしゃべりな奴だ
河野美穂と共にいろいろ聞いて来たりもする
「多岐澤か」
「でもリュウがお化け屋敷なんてね」
「俺は盛り上げ役だ。ま、来てみりゃわかる」
「僕はいいや」
「桜さん？」
「僕・・・怖いのはちょっと」
桜さんってこの手の苦手なんだ
「ねぇ、盛り上げ役って？」
「ん？おたのしみっつー事で」
「教えてくれてもいいじゃない」
「じゃあ俺寝るな」
「ちょっ・・・」
「おやすみ！！」
「・・・逃げた」
これは言わないようにいわれてんだよ
俺はベッドに倒れこみそのまま眠りについた

もうすぐ始まるハロウィンの成功を祈って・・・

第二話　終わり

第三話　ハロウィンパーティ

ハロウィン当日
「ようし、準備は万全だな」
「あぁ」
「あと、驚かせる道具は・・・」
「ここにあるもので足りるだろ」
たぶんな
「そうだな」
「真っ暗にはなるのか？」
「たぶんな」
「・・・俺、試しに回ってみるよ」
「おお、そうだったな」

数分後
「まぁ大丈夫と思うけどな。後はガイドがカバーすれば」
「じゃあこれで行きましょう」
「ガイドになる奴は？」
「俺と森堂と・・・貴倉だったかな」
貴倉香蒔
なんかいろいろと謎の多い奴だ
「お前か」
「ふっふっふ・・・」
「お前は何すっかわかんねぇから危険だ」
「何かしたりはしない。ただ俺を指名した人たちを驚かせればいいのだろ？」
その驚かし方がわからねぇから危険なんだよ
「なぁ、この三人で誰が一番指名されるか賭けようぜ」
何を言い出すかと思えば・・・

何考えてんだよ瑞島は・・・
「ふん、いいだろう。ま、俺の勝ちは決まりだがな」
「何を言うんだ。俺が一番に決まってんだろ！」
二人とも本気だ・・・
「俺、パス」
「何だよ、森堂。賭けしようぜ」
「なぜしないんだ？」
「無意味だから」
「つまんねぇ～」
何がだよ
「お前、負けることがわかっているからやらないのか？」
「あ？」
「そうか！負けたところを見られたくないから賭けないのか」
「んだと！？なら決めようじゃあねぇか！賭けてやるよ！！」
俺はついにキレた
負けと決めつけられちゃあだっまてはいられない！
「やはりな」
「何がだ！」
「お前は人一倍の負けず嫌い。だからお前は負けだと言えばこの賭けに乗ると思ったんだ」
「・・・」
はめられた・・・
「お前は確か約束事は絶対破らない男だったな」
「チッ！！わあったよ」
「んじゃあ、賭けはどうする？」
「賭けといったらやはり金だろ」
ギャンブルかよ・・・
「飲み物で十分だ」
「オーケー。じゃ、負けた二人は勝った奴に飲み物を一人一本おごること」

「今のうちに俺におごっておいてもいいのだぞ？」
「何言ってんだ！勝つのは俺だ！」
飲み物ぐらいで・・・こいつらは・・・

そしてハロウィンが始まった
「お化け屋敷開けるわよ」
「はーい」
麻河も河野も結構やる気だ
「あ、ねぇねぇお化け屋敷だって。行ってみない？」
「面白そうね。行きましょ」
開けたとたん早速客が麻河のいる受付へと足を運んでいた
「このお化け屋敷は一人から四人までです」
「私たち、三人です」
「わかりました。この、瑞島、貴倉、森堂の中から一人をガイドとして一緒に入ることが出来ますが。どうしますか？」
麻河が俺らを指しながら聞いた
「俺と行ったら盛り上がるよ。どう？」
「こいつより俺のほうが盛り上がるぞ」
二人ともそんなに勝ちたいか・・・
つうかこいつらの言い方ってナンパしてるだけのような気が・・・
「どうする？・・・」
三人は相談しだした
「じゃあ、この人で」
と言いながら俺を指した
「はい、じゃあ、どうぞ」
「・・・入る前に聞くけど怖いのとか大丈夫？」
「はい。私たちみんなお化け屋敷とか好きですから」
「そう。じゃ、中入って」
俺が入ろうとした時、瑞島がボソッと
「何であいつがいいんだ？」

って言った
お前らに邪気が感じたからじゃねぇか？

部屋の中
「ここは墓場と墓場の間に出来た道・・・ここにはたくさんの霊がさまよっている・・・」
「な、なんか怖くない？」
「う、うん・・・」
「まだ、歩き始めたばっかりなのに・・・」
俺は中一のとき演劇部に入ってたんだ
だからこういう雰囲気を作り出すのは得意なのさ
「誰もいないのに足元にボールのような物が転がってきたり」
「・・・！！」
「どうしたの？」
「い、今、な、何か足に当たった・・・」
「え！？」
それはテニスボールだな
俺がみんなに頼(たの)んで話にあわせて何かするようにしたんだ
「歩きたくても歩けなくてとうとう死んでしまった男の子や」
「きゃーっ！！」
「何？どうしたの？」
「い、今誰かに、あ、足をつかまれた」
「え！？やだここ・・・」
それは潮原(しおはら)だな
あいつは背がちょっと小さいから見つかりづらいんだ
「人魂や」
「え！？」
「女の人の幽霊、」
「あ、や、いや・・・」
「いろんな魂や霊が集まる所・・・ここはそういう場所」

「怖い・・・」
「ねぇ！出口はまだ！？」
そんなに怖いか？
もうすぐで終わるけどな・・・
「しっ！！静かに」
「な、何！？」
「誰かが後ろから・・・」
「え！？」
「振り向かないで！！振り向いたら最後ですよ・・・」
「ど、どうやって逃げるの？」
もう泣きそうだな・・・
「俺についてきて」
「は、はい・・・」
「こっち！走って！！」
みんないっせいに走り出した
「速く！」
「いやぁーーー！！」
「もっと速く！！追いつかれるぞ！！」
「もうやだーーーー！！」
「ここだ！速く！！！」
そしてみんながその場所へ走りこんで
「はい、お疲れ様でした」
「え？」
「もうお化け屋敷から出たよ」
「お、終わったの？」
「うん」
「怖かったよ～」
やば！泣きそう！！
やりすぎたか・・・
「そ、そんなに怖かった？ご、ごめんな」

でもその子は泣きそうだ。参(まい)ったな・・・
そうだ
「これやるよ」
俺は三人にそれぞれキーホルダーを渡した
「え？」
「怖がらせちまったからな・・・誰にも言うなよ」
「は、はい！」
三人はどこかへ走って行った
よかった
元気出たみたいだ
「さて、次行くか」
俺は受付のほうに走った

「あれ？瑞島は？」
「中だ」
「また一組来たのか。お前は選ばれないなー」
「ふん、これから選ばれるようになる」
強がってる・・・かける声も無いな
「森堂君はどうだったの？」
「あぁ、それがさ・・・」
・・・
「そう。その子、大丈夫だった？」
「たぶん、な」
「しめた！」
貴倉が小声で何か言った
「ん？何か言ったか？貴倉」
「いや、何も」
そこに暁楓(あかかぎで)が受付に来た
暁は雪紀の友達で俺とは顔見知(かおみし)りの様なものだ
「お嬢さん。中に行くならこの俺とのほうがいい。」

「あら、なぜかしら？」
「あの男は中で女の子たちを泣かせたからです」
「それは本当なの？森堂龍輔君」
なぜフルネームで呼ぶ！？
「あ、あぁ。ちょっとな、すげぇ怖(こわ)めの感じで中を回ってたんだ。
まさか泣くとは思わなくてな」
「ふーん、そう・・・」
なにやら考え出した暁
「では俺と・・・」
「いいえ。森堂龍輔君と入るわ」
「・・・俺？」
「えぇ」
俺は驚いている
こいつは俺のことを嫌(きら)っているはずからだ
「な、なぜです！？彼は女の子を泣かせたのですよ！？」
「私、とても怖いの好きですから」
・・・
「・・・じゃあ、すげぇ怖いのでいいのか？」
「はい」
俺は中へ入りさっきと同じ内容をやった
これが以外に疲れる
「じゃあな」
「では、また」

俺が受付に戻ってみると
「な・・・どうしたんだよ。いきなりこんな大勢(おおぜい)」
「し、しらねぇよ。まさか、みんな俺のために・・・？」
何言ってんだよ瑞島は・・・
「違うわよ！」
するといきなり麻河がこっちに来た

「何でだよ」
「みんなあなたにガイドしてもらいたいんだって言ってるの」
「あ？俺？」
「ありえん」
「何で？」
「知らないわよ」
・・・聞いてみるか・・・
俺はその中の一人に聞いた
「ガイドは誰にしてもらいたいんだ？」
「森堂って人」
「何で？」
「咲希(さき)がお化け屋敷行くならその人にガイドしてもらったらいいよって」
「咲希？」
「なんかちょっと泣いてたけどね」
・・・あの子か
「じゃあ何で他の二人じゃだめなの？」
「百合奈(ゆりな)が他の二人はナンパしてくるからやめた方がいいって」
・・・納得
「なぁ俺一人じゃ疲労が大きすぎるんだが・・・」
「皆さん！」
！！
麻河がいきなり大声を出した
びっくりした
「彼一人では彼の身が持ちませんし時間がかかります。違うガイドで我慢してください」
「我慢って・・・」
すると
「えー。じゃあ私はいいや」
「私も」

みんなぞろぞろと離れていって残ったのはわずか八人
「・・・あなたたちは？」
「お化け屋敷に入りたいの」
「では・・・四人以下で一組になってください」
八人は話し合い四人の組が二つ出来た
「じゃあ入る前に怖さはどれぐらいがいいですか？」
「普通の怖さで」
「わかりました。では、どうぞ」
俺は一組終わらして
「怖さはどれくらいが？」
「私たちはちょっと怖めで」
「どうぞ」
もう一組終わらした

「疲れた・・・」
「お前はいいよな」
「何が？」
「女の子にちやほやされてさ」
「でも、貴倉(こいつ)なんか誰にもガイドしてって言われてねぇよ？」
「うるさい！」
「でもなんで俺らは選ばれなかったんだ・・・？」
それはきっとお前らの最初がナンパだからだろ
「ん？おい森堂」
「なんだよ」
「お前にまた来たぞ」
・・・なんとなくわかる
誰がいるか・・・
「・・・雪紀に椛に桜さんか？」
「龍輔君すごい」
「正解だよ」

「・・・入るのか？」
「うん」
？・・・あれ？
「椛と桜さんはこういうの嫌いなんじゃないですか？」
「で、でも挑戦してみる」
「ぼ、僕も！」
「・・・そうですか」
「じゃあ入る前に怖さはどれぐらいがいい？」
「レベルみたいなのがあるの？」
「あぁ、俺だけな」
「じゃあ・・・」
「怖くないのがいい」
桜さん、即答
「では中へどうぞ」
「はーい」

「ここは昼には人が大勢利用している墓場の隣に出来た道・・・しかし夜になると誰も通らなくなる・・・」
「さすがリュウ君ね・・・」
「うん、こういうの得意だもんね・・・」
怖いのが平気な二人もさすがに怖いようだ
「その理由は・・・夜になると呪いの歌が聞こえると言う伝説があるから・・・」
「ぼ、僕怖いんだけど・・・」
「だ、大丈夫ですよ」
「そうだよ。これはリュウの作り話なんだから」
「その歌を女の人が聞いてその場にとどまってしまうと・・・死に到ると言う・・・」
「死んじゃうの！？」
桜さん・・・そこまで驚くか？

でも、やばいかな・・・
「ほら・・・聞こえてきました・・・」
「え！？」
『か～ごめかごめ、か～ごのな～かのとおりいわ・・・』
「ひっ！！！」
「止まらないで下さい。後ろから死神が来てますよ」
「え？」
「振り向かないで！！恐怖のあまり身動きが取れなくなって、あの世に・・・」
「じゃ、じゃあどうすれば・・・」
まずい、椛まで・・・
「俺についてきて。全速力で！」
「来なきゃよかった～！」
やばい、桜さんの精神面が崩れてきてる
「ここです。速く！！」
みんな全速力で走ってきた
「はい、お疲れ様！」
「終わった？」
「はい。終わりました」
桜さんは安心したのか膝（ひざ）から崩れた
「怖かった・・・」
「何だ、二人も怖かったんだ」
「わ、私は別に・・・リュウの作った話なんか怖くもなんとも無いよ！」
「私は怖かったな・・・」
桜さんは顔色が悪い
雪紀は意地張ってるのか？
椛は手が微妙に震えてる・・・
「一番怖くないのにしたんだが・・・」
「これで一番怖くないの！？」

「あ、あぁ・・・」
「じゃあまだ上があるの？」
「あるぞ・・・」
「・・・ウソついてないよね？」
なぜそこまで聞く？
「あぁ。今のは俺の声と歌だけだろ？」
「う、うん」
「一番怖いのは足元に何かが転がってきて、足をつかまれて、火の玉みたいな物使って、幽霊の格好をした人が出てくるぞ」
「そ、そうなの？」
「あぁ」
雪紀がちょっと震えてる
想像したな・・・
「それでまた入るか？」
「け、結構です」
「そうか」
なんだ、つまんねぇな
「じゃあ私たちは自分のクラスに戻るね」
「おぅ。あ、雪紀！」
「何？」
「また俺を門のところで待つ気ならはやく帰った方がいいぞ」
「うん、わかった」
・・・本当にわかったのか？
「あ、烏丸先生」
「よ、どうだった？」
この人は烏丸啓梧先生
友達感覚で話が出来る明るい熱血教師
お化け屋敷の間、隣の部屋にいてもらった
「まぁまぁですかね」
「そうなのか？女子の叫び声が隣の部屋まで聞こえてたぞ？」

「そうなんですか？」
「あぁ。あの声はたしか・・・佐藤(さとう)咲希だったかな」
「先生の生徒の名前に対する記憶力はさすがですね」
烏丸先生は自分の受け持った生徒の名前は全て記憶してるんだ
「俺が脅かし過ぎてしまって物で・・・」
「こいつその子を泣かせたんですよ」
「まさか泣くとは思わなかったんだよ」
「まぁ、無意識で泣かせてしまったんなら大丈夫だろ」
・・・・・・
「それじゃあ、ハロウィンももうすぐ終わるが・・・もう片付けるけるか？」
「先生は入ってみませんか？」
「そうだな。先生入ろうぜ！」
「二人もだぞ」
俺は瑞島と貴倉を見て言った
「お、俺は・・・」
「入るだろ？麻河はどうする？」
「じゃあ、私も入るわ」
「なら俺も！」
・・・こいつは・・・
「で、みんな怖さはどうする？」
「ほう・・・お前はレベルを選ばせてそのレベルにあった事をするのか」
すげぇ・・・
「はい。そのとおりです」
「俺は一番怖いのだ」
「俺、普通の」
「俺も普通ので」
「私は一番怖いのにしてみようかしら」
・・・二つに分かれたか

「わかりました。では、一番怖いもので・・・どうぞ」
「ちょっと待て！俺らは普通のっつったろ！」
「怖いのか？」
「ぅ・・・わかった！行ってやろうじゃん！」

数分後
「どうだった？」
「お、お前、これはやりすぎだろ」
「これじゃあ相当怖いのが好きな女の子じゃないと女の子は絶対泣くぞ」
「そうか？先生はどうでしたか？」
「お前ならもっと怖くも出来たんだろうが、もう少し怖さを引く事は出来んのか？」
先生も怖かったのか？
「麻河はどうだった？」
「・・・あまり他の人にお勧めできるような物じゃないわね」
・・・つまり怖くし過ぎ、ってか
「俺なりに怖さは引いたんだが・・・」
「・・・まぁいい。とりあえず片付けをするぞ」
「はい」

第三話　終わり

第四話　恋の確信・・・？

「じゃあまたな」
「あぁ」
片付けが終わって学校を出ると
「や、やめてください」
「いいじゃん、いいじゃん。俺たちとどっか行こうよ」
ナンパされてる雪紀がいた
「よう、雪紀」
「あ、リュウ！」
「ん？誰だ？おめぇ・・・」
お前らこそ誰だ
「・・・森堂龍輔」
「森堂？しらねぇな」
「・・・おい、森堂龍輔ってあの森堂じゃ・・・」
「・・・！ま、まさか。んなわけ・・・」
・・・？
何話してんだ？
「おい、雪紀！こっちこい」
「う、うん」
「あ、おい！」
雪紀は隙を見てこっちに走ってきた
「あいつらにナンパされてたのか？」
「うん、そう」
「そうか」
俺はキレたぞ
俺の妹にナンパだぁ？
許せねぇ！！
「おい、お前ら」

「何だよ」
「よくも俺の妹に手ぇ出してくれたな」
バキバキッ！！
手の関節を鳴らした
「妹？それがどうした」
「この落とし前、つけてもらうぞ！」
「やっぱりそうだ！あいつは普通より力が強くてしかも奴の妹や姉に手を出したらいつもの約二倍の力を発揮するって言うあの森堂だ！」
「何！？あの女そいつの妹だったのか！？」
俺はいっきにダッシュして奴らの腹を思いっきり殴った
「かはっ・・・！！」
「ぐはっ・・・！！」
二人はそのまま地面に倒れこんだ
「二度とこいつに手を出すな！！わかったな！！！」
「は、はい！すみませんでしたー！」
奴らはそういいながら走り去った
「あ、ありが・・・」
「だからはやく帰れっつったのに。この時間帯はあんな奴らばっかりだから」
「・・・ごめんなさい」
・・・ふぅ
「別に怒っちゃいねぇよ。ただ、お前が心配なんだ」
「リュウ・・・」
「・・・」
俺は今の雪紀の安心したような可愛らしげな顔を見てなぜかドキドキしてきた
「と、とりあえず帰るぞ」
「うん！」
うれしそうだな・・・

まぁ、なんか俺もうれしい

「・・・なんか最近二人でいると俺たちって会話ねぇな」
「そ、そうかな」
「あぁ・・・」
ま、話すことが無いってのもあるんだけど
「ね、ねぇ」
「ん？」
「リュ、リュウは今日の私のコスチューム、どう思う？」
「どうって・・・」
俺は雪紀の今日の姿を思い出した
・・・
自分で顔が赤くなっているだろうという事がわかった
「やっぱりダメだった？」
「・・・かわいかったと思う・・・」
「え・・・？」
「はずいからもう言わねぇぞ！」
「ありがと・・・」
我ながらはずい事を言った
「ねぇ」
「ん？」
「今日のリュウ、カッコよかったよ」
「あぁ、ありがとう・・・」
言われるのもはずいな

「ただいま」
「あ、おかえりなさい」
「龍輔君に雪紀ちゃん、おっかえり～」
桜さん！？
早ッ！！

「桜さん」
「今日は早いんですね」
「あれ？それじゃあいつもは遅いって言いたいの？」
・・・遅いでしょ・・・
「い、いや、そういうことじゃ・・・」
「まぁ、いつもは遅いんだけどねっ♪」
自覚してんのかよ・・・
「ご飯できたよ」
「今日はビーフシチューだよ」
「おいしそう」
今日はなんかうるせぇなぁ・・・
「いただきます」

約一時間後
「ごちそうさま」
「おいしかった～」
「桜さんいつもおいしいって言うよね」
「だっておいしいんだもん」
うるさいなぁ・・・
「じゃあ食器も洗ったし帰ろうか、雪紀ちゃん」
「うん。じゃね、リュウ」
「・・・」
「リュウ君？」
「し～！」
「桜さん？」
「龍輔君、寝ちゃったよ」
「え・・・？」
「お化け屋敷、結構疲れたみたいだね。ぐっすり寝てる」
「・・・じゃあ私たちは帰りましょうか」
「うん」

「じゃあ、また」
「うん、じゃあね椛ちゃん、雪紀ちゃん」
・・・

「ほら龍輔君、起きて」
「ん・・・あ、桜さん。あれ？二人は？」
「椛ちゃんたちはもう帰ったよ」
「そうですか」
すっかり寝てた・・・
「うん。龍輔君は早く部屋に戻って寝たら？ここで寝てると風邪ひくよ」
「はい、おやすみなさい」
「うん、おやすみ」
その日はひどく疲れていたがすぐに眠りに付くことはなかった

その日はいつもより心がドキドキしていた
頭から離れないあの女性(ひと)のことを好きなのかも知れない
そう思うと心がドキドキする・・・

第四話　終わり

第五話　兄妹と風邪

ハロウィンから約一週間
「・・・」
俺は起きてとりあえずリビングへ向かった
・・・が
ドサッ！
「おじゃまします。リュウ君、おはよう」
「・・・」
「あれ？リュウ君？」
椛がリビングにきた
「！！リュウ君！？」
「ハァハァ・・・」
息が、しづらい・・・
「大丈夫！？」
「こ、これが・・・大、丈夫に、見え、るなら、眼科、行け・・・」
「・・・すごい熱！どうしたの？」
「疲(つか)れが、出たの、かも、な」
「今、部屋につれてくわ」
「でも、飯、つくっ、て、学、校、行かな、いと」
「今日は学校休みなさい！」
「だが・・・」
「そんな無茶して風邪こじらしたらどうすんの！？」
「・・・」
確かに、椛の言うとおりだ・・・
「わかった・・・部屋、戻る」
「肩を貸すわ」
「大、丈夫だ」
「でも！」

「いいから！！俺は、大丈、夫、だから」
「わかった・・・」
・・・言ったはいいがつらい・・・
熱も大変だ・・・

やっと着いた・・・
瑞島に電話して今日休むこと言うか・・・
「・・・」
トゥルルルル・・・
「はい・・・」
「瑞、島か」
「森堂！？大丈夫か！？息が荒いぞ！！」
「熱、出てな・・・今日、学校休(やす)、むから、言っといて、くれ」
「わ、わかった。体に気をつけろよ？」
「あぁ・・・」
あいつもなんだかんだ言っていい奴だよな・・・
俺はそのままベッドに入った
「ハァハァ・・・ゴホッゴホッ・・・」
「リュウ！！」
「雪、紀！？お、前・・・学校、は？」
「お姉ちゃんがリュウがすごい熱だから学校休んで面倒みておきなさいって」
「そう、いう椛は？」
「お姉ちゃんは今日はずせない会議があるんだって」
人に押し付けて会議・・・
「それよりリュウは大丈夫？」
「こ、れが、大丈、夫に、見えるか？」
「見えないけど・・・」
「そん、な事よ、り、お前は、外出、てろ・・・」
「何で！？」

俺はつらいのに理由まで聞きたいか・・・
「こ、こは今、病原、菌でいっぱい、だ・・・お前、に、風邪をう、つしたく、ない・・・」
「でも・・・」
「いい、から、出ろ・・・」
俺は無理やり雪紀を外へ出した
「リュウ！？本当に大丈夫なの！？」
「あぁ・・・大丈夫、だ」
「・・・わかった」
病人にあんまり無理させんじゃねぇよ・・・
俺はすぐにベッドへと戻った

『お兄ちゃん大丈夫？』
『うん、大丈夫だよ』
『でもお熱高いんでしょ？』
『平気だって・・・』
『本当？』
『うん。それより雪紀ちゃんは向こうにいて』
『え？』
『熱うつしちゃうかも知れないから』
『やだ。私、お兄ちゃんのお熱が治るまでここにいる』
『でもうつしちゃったら・・・』
『お兄ちゃんが心配だから、ここにいる』・・・

・・・夢か
今のは俺が風邪をひいた時の・・・
コンコン・・・
「リュウ？」
ノックの音と共に雪紀が入ってきた
「雪紀？」

「お昼ご飯、おかゆ、作ってきたよ」
「え？」
時計を見るともう十二時を過ぎていた
「もうそんな時間か・・・」
「熱、少し引いたみたいだね」
「あぁ。呼吸しやすい・・・少し寝たのがよかったのかもな」
「・・・はい」
「あぁ・・・」
俺が起き上がろうとした時
「あぁ、病人は寝てていいから」
「でもそれだと飯が食えん」
「だから、はい」
雪紀がレンゲにおかゆを掬(すく)って俺の口元らへんに運んだ
「何？」
「あーん、して」
・・・はい？
「やだね」
「何で？」
「・・・はずい」
「ほら、恥ずかしがらないでよ。ここには私たちしかいないんだから」
「だが・・・な」
はずいもんははずい
「ほらほら・・・」
「・・・」
「食べないの？」
「・・・あ」
俺は観念して口を開けた
「はい」
「・・・うまいな・・・」

「ありがと。はい」
「あ。・・・」
しばらくこの行動が続いた

「・・・俺寝るな」
「うん、おやすみ」
「あ、雪紀。この部屋出たら手洗いうがいを徹底的にしろよ」
「はーい」
「じゃあ、おやすみ」
目を瞑(つむ)るとすぐに俺は寝てしまった

『雪紀ちゃん・・・ごめんね』
『お兄ちゃん・・・？』
『僕のせいで雪紀ちゃんに熱をうつしちゃって、ごめんね』
『ううん。お兄ちゃんのせいなんかじゃないよ』
『でも・・・』
『私がお兄ちゃんの言うことを聞かなかったからいけないの』
『でも・・・でも、ごめんね』
『ううん、大丈夫だから』
『・・・今度は、今度は僕が雪紀ちゃんの熱が下がるまで一緒にいてあげるから』
『・・・ありがとう。お兄ちゃん』・・・

・・・今度は雪紀が熱になった時の夢・・・
「懐かしいな・・・」
・・・少し体もダルさが引いたから下に行こうかな
「ん、リュウ！起きて来て大丈夫なの？」
「あぁ。おかゆ食ってまた寝たら少しダルさが引いてな」
「で、どこに行くの？」
「少しそっちにいる。ずっとベッドの中にいたから部屋出たら寒く

てな」
「そう」
俺はリビングへ向かい座った
と、そのすぐあと
ピーンポーン・・・
「はーい」
呼び鈴が鳴った
「やっほー。お見舞いに来たよ」
「森堂君は？」
「今、リビングに・・・」
「龍輔、大丈夫？」
「・・・」
「？・・・龍輔？」
「寝てる」
「さっき下りて来たばっかりなのに・・・」
その時、体が下に動き
ゴンッ
「いっつーーーーっ！！」
「リュウ、大丈夫？」
「ん？そこにいるのは槻嶋と河野と多岐澤か？」
「大正解！」
「よくわかったね」
「雰囲気でな」
「雰囲気？」
「あぁ。お前ら三人が集まるとなんか独特な雰囲気が出来るんだ」
「へぇー」
へぇーって・・・
ん？手になんか持ってるな
「それ、なんだ？」
「あぁ、これ？これはね・・・」

「そこのケーキ屋さんで買ってきたんだよ」
「そこの？」
「ほらぁ、前に四人で行ったじゃん」
・・・記憶に無いな
「そうだっけ？」
「もぉ、忘れたの？」
「まぁ、いいよ。龍輔はもともとケーキとかって好きじゃないもん。はい」
槻嶋がケーキの入った箱を俺に渡した
「ん？ケーキ屋、ラスカ・・・あぁ」
「思い出した？」
「あぁ。あそこのことか」
「ねぇ、どこなの？そのラスカって・・・」
雪紀は知らないのか・・・？
「ラスカは駅前通りにあるケーキ屋だ。前にこの三人に連行されて連れて行かれたところだよ」
「連行って・・・」
「まぁ、そこで眠気覚ましにちょうどいいかってそこで一つケーキを頼んだんだ。そしたらそこのケーキな、あんまり糖分を使ってなくてちょうどよくってな。一つのところが三つ食っちまったんだ」
「へぇ～」
「そう言えばあの時、俺のおごりにされたなぁ・・・」
「だからこうやってお礼とお見舞いを一緒に持ってきたのよ」
・・・都合のいい事を
「それで次は『あの時ケーキを持って行ったんだからその分お礼して』ってか？」
「ぅ・・・」
図星のようだな・・・
「さすが」
「するどいわね」

「そのとおりなのかよ・・・」
「じゃあね」
「じゃ」
何なんだ？あいつらは・・・

「おじゃまします」
椛が帰ってきた
「お姉ちゃん、おかえり」
「よぅ、椛」
「リュウ君。もう風邪は？」
「ほぼ完治した」
「だいぶよくなったのね」
だから、ほぼ完治したんだって
「あぁ、一日中家にいたからな」
「でも・・・」
「ん？」
「何で台所にいるの？」
「あぁ。さっき見舞いに来た奴らがいてな、でそいつらがケーキを買ってきたんだ。だからその礼」
「で、ケーキを作ってるの？」
「そうだ」
つってもまだ下地のところだがな
この分じゃ三個作るのに二、三時間かかるぞ・・・
「ご飯の準備しようよ、リュウ」
「まだなの？」
「まだだ！」
「しなくていいの？」
「まだ五時だから大丈夫だろ」
たぶんな！！
「でもリュウってケーキ一個作るのに約一時間かかるよね」

「リュウ君、いったい何個作るのかな？」
「三個」
「・・・ケーキよりご飯の準備のが先じゃない？」
「そうだな」

今日の晩ご飯はすき焼き、ご飯、その他おかず
「いただきます」

「ごちそうさま」
「おいしかった」
「ケーキ作りの続きでもするか」
「私たちは食器を洗いましょ」
「はーい」
・・・
「眠ぃ・・・」
「もう寝たら？リュウ」
「だが、まだケーキが出来てない」
「私たちが作るよ」
「いや、自分で作らないと礼にならない」
「わかった。じゃあ、手伝いだけでも」
何でそこまでなにかしようとするかな・・・
「あぁ、じゃあクリームを作ってくれるか？」
「えぇ、いいわ」

約二時間後
「出来た・・・zzz」
「あら、出来たと思ったら」
「リュウ、寝ちゃったね」
「でも、立ったままって・・・」
「すごいよね・・・」

『今日の的はお前だ！ぶっ飛ばす！！』
『やめろよ！』
『へっ！森堂か』
『何でいつもいじめをするんだ』
『何でって楽しいからに決まってんじゃん！』
『・・・！』
『よし、やっぱり今日はお前が的になれ！！ははっ！喰らえっ！！』
『お前が喰らえ！！』
『なっ！？』
ドスッ！
『うっ・・・』
『こらっ！何やってるの！？』
『先生・・・』
『すいません、先生。これは僕からやった事です』
『またなの？森堂君』
『すみません』
『もういいわ。廊下に立ってなさい』
『はい』・・・

・・・また、懐かしい夢だ
「・・・あれ？ここは・・・」
俺が起きるといつの間にか自分の部屋にいた
コンコン
「リュウ君、起きた？」
椛が聞きながら入ってきた
「あぁ、ちょうど今起きたところだ」
「そう」
・・・
「なんか用か？」

「あ、うん。あのね、明日の朝から私と桜さんはちょっと出かけるから」
二人でどこへ・・・？
「何かあるのか？」
俺は声色を変えて聞いた
「うん。ちょっと、ね」
教えられない・・・か
実は桜さんと椛は魔法が使えてそのために出掛けるのだろう
「んで？帰りはいつになるんだ？」
「日曜日の夜に帰ってくる予定」
「そうか」
「それでその間雪紀ちゃんの事、頼みたいんだけど・・・」
そうか、二人で行くとなればそうなるな・・・
「わかったよ」
「よろしくね」
「あぁ。お前らも気をつけろよ」
「ありがとう。じゃね」
「あぁ」
俺はベッドにつきすぐに眠りに落ちた

「リュ、く、きて」
ん？
「リュウ、やく起き、」
誰だ？
「リュウ！早く起きて！」
「・・・雪紀？」
「早くしないと学校・・・」
「え？・・・なっ！」
時計に目をやるともう七時半だった
「やばっ！早くしないと遅刻！」

「結局、遅刻しちまったな～」
俺は帰路を歩きながらつぶやいた
「あの学校の先生は罰がきついぜ・・・」
俺は遅刻したからと言って罰が与えられた
廊下に立っているだけかと思えば・・・
「廊下に水が入ったバケツを腕を前にまっすぐ伸ばして持って空気イスをしてろって・・・きつ過ぎだろ・・・」
たかが遅刻で・・・
おかげで腕がだるい・・・
しかも足もだるい・・・
「ただいまー」
俺は椛から預かったカギで綺香(あやか)家に戻った
「リュ、リュウ？な、何でう、家に？」
「椛と桜さんは今朝からどっか行った。だから俺が雪紀の世話役やることなった」
「そ、そう・・・」
「・・・」
息遣いが荒いな・・・
「雪紀、大丈夫か？」
「な、何が？」
「熱、あるんだろ？」
「な、何言っ、てるの？熱、なん、て無い、よ・・・」
そう言って同時に雪紀が倒れそうになった
「雪紀！！」
俺は雪紀が倒れないよう受け止めた
「おい雪紀！・・・すごい熱じゃねぇか」
「たい、したこ、と、ない、よ」
「どうしてこうなるまでほおって置いたんだ！電話ぐらいしろよ！！」

「私は、もう、誰、にも、たよ、ら、ないって、決めた、の」
こいつ！
「もういい！お前をベッドまで運ぶ！」
「ほおって、おい、て・・・だ、いじょう、ぶだ、から」
「ほおって置けるわけねぇだろ！お前が、俺の妹が苦しんでるってのによ！！」
「リュ、ウ・・・」
そして雪紀は目を閉じて眠りについた
「大丈夫・・・安心して眠れ・・・」
俺は雪紀をベッドへ連れて行った

その夜・・・
「・・・ここ、は？」
「よう、雪紀。熱はどうだ？」
「ちょっと、よくなったみたい」
「そうか」
よかった・・・
「腹、減ってねぇか？」
「うん、ちょっと」
「じゃあ、おかゆ、作ってきてやる」
「うん・・・」
バタン・・・
「ありがとう」
かすかに雪紀の声が聞こえた
「へへっ・・・」

「おかゆ、出来たぞ」
「あ、うん、ありがとう」
雪紀が起き上がろうとした
「あ、起き上がらなくていい。お前は寝てろ」

「でも・・・」
「いいって、はい」
「まさか・・・」
「仕返しと考えておけ」
「・・・ずるい」
何でだ・・・
「ずるいもんか。ほら、食べないのか？」
「・・・」
「食うもんくわねぇと筋力と体力が減っていつもより動き辛くなるぞ？」
「・・・」
食わねぇか・・・
「・・・んじゃ俺が食うか」
「・・・それ、私のでしょ？」
「そうだけどお前が食わないんじゃもったいないだろ？」
そう言ってレンゲを俺の口元に持ってきた時
「・・・あ、あーん」
やっと食う気になったか
「はい、あーん」
「ほのはーんへひふのひゃめへふんない？」
「じゃあお前も口開けたときあーんって言うのやめろ」
「ふ・・・」
「そして口に物を入れたまま喋るな」
「ごめん・・・」
・・・暗くなるなよ
「ほら。お前らしくねぇぞ？お前は明るいのが一番だ」
「・・・ありがと」
「とりあえず、おかゆ食って寝ろ」
「うん」
「・・・」

雪紀は喋らなくなった
・・・考え事か？
「ん？どうした？」
「・・・前にも似たようなことがあったなって」
「似たようなこと？」
「うん・・・私が風邪ひいて私とリュウしかいないとき、リュウがおかゆを作ってくれて・・・今みたいに食べさせてくれて・・・リュウは一生懸命看病(かんびょう)してくれて・・・」
俺と雪紀が小学生の頃の事か・・・
「・・・あったな、そんな事も」
「うれしかったなぁ、あの頃」
・・・うれしかった、か
「ねぇ、リュウ」
「ん？」
「リュウって何でそんなに優しいの？」
「雪紀・・・お前・・・」
雪紀の目からは涙がこぼれ落ちていた
「その優しさが、人を悲しませる事もあるんだよ？」
「雪紀・・・」
雪紀は俺が優しくすることで悲しくなっちまうのか？
「ごめんな・・・でも俺、お前の事が心配で・・・」
「ううん、いいの。私、リュウのその優しさ、嫌いじゃない」
「じゃあ・・・なんで・・・」
何で泣くんだよ・・・
「リュウが優しくするから頼りたくなる。でも私は、もうリュウに、みんなに頼りたくないの！」
・・・おい・・・
「だから、もう、私に優しくしないでよ・・・」
「・・・なんだよそれ」
「え？」

「もうみんなには頼りたくない？優しくしないでほしい！？」
「・・・」
くっ・・・！！
「俺は・・・俺はお前の兄だ。たとえ血は繋がっていなくても俺はお前の兄だぞ・・・」
「リュウ・・・」
「そんな俺にもう優しくするな！？そんなの出来るわけねぇだろが！！お前は俺の・・・俺の大切な妹なんだよ・・・お前が望んでいなくても俺はお前に優しくする」
「・・・リュウ」
「そして、俺を兄として、男として頼ってくれよ！！俺はお前に頼ってほしいんだ・・・でないと、あの時作ったでけぇ恩を返せねぇじゃねぇか・・・そしてお前らに精一杯優しくすることが、守ることが、俺の家族への感謝の気持ちなんだよ・・・」
「リュウも・・・あなたも、泣かないでよ・・・」
・・・雪紀・・・
「そしたらもう、リュウに、みんなに頼るしかないじゃない」
「・・・へへっ」
「うぅ・・・うわ～～～～ん」

事が収まり就寝前
「ねぇ、リュウ」
「ん？なに？」
「本当に頼ってもいいの？」
「あぁ、いいよ」
「迷惑じゃない？」
「全然迷惑じゃない」
「・・・ありがとう」
へへっ・・・
「どういたしまして」

「じゃあもう寝るね。おやすみ」
「うん、おやすみ」

『ねぇ、お兄ちゃん』
『なに？雪紀ちゃん』
『お兄ちゃんは、私のことどう思う？』
『どうって？』
『その、あの・・・暗いとかバカとか・・・』
『何で例が全部マイナスなの？』
『わかんない・・・』
『僕は雪紀ちゃんの事、元気で明るくてかわいい子だと思うよ』
『・・・ありがと』
『雪紀ちゃんは僕のことどう思うの？』
『お兄ちゃんはね、元気で強くて周りの人に元気をくれるカッコいい人だよ』
『ありがとね、雪紀ちゃん』
『うん・・・ねぇ、お兄ちゃん』
『なに？』
『私のこと・・・好き？』・・・

「リュ、リュウ？」
「ん？どした？」
「この手、何？」
雪紀は右手を挙げた
と一緒に俺の左手も挙がった
「あぁ、お前がなんか苦しそうだったから手を握った」
「・・・おなか減った」
「ちょっと待ってろ。朝飯作ってくるからな」
「うん」
俺は雪紀の手を離し台所へと向かった

「ほれ、おかゆでいいな」
「・・・そろそろ飽きた」
「もう作っちまったんだから食え、はい」
「わかった」
雪紀はレンゲにかぶりつきおかゆを食べた
これ、意外と面白いもんだな・・・
「はい」
「はむ・・・」
繰り返しているうちに雪紀が早くほしそうに待ち構える様になってきた

「はい、終わり。もう空(から)だ」
早かった・・・
「ごちそうさま」
「じゃあ俺、下にいるから。なんかあったら言えよ」
「あ・・・」
「ん？どうした？」
「・・・ううん。なんでもない・・・」
「そうか・・・」
バタン・・・
俺はドアを閉めて下へ向かった
「・・・あのね、リュウ。お願いがあるの・・・・・・今日は、ずっとそばにいてほしいんだ・・・」

しばらく下にいたが・・・
「退屈・・・つまんねぇ・・・」
自分の家戻るか・・・？
「そしたら雪紀を一人にすることになる・・・そんな事できねぇな・・・」

でもやっぱつまんねぇ・・・
「雪紀は大丈夫かな・・・」
俺は雪紀のとこへ行くことにした
コンコン・・・
「雪紀？」
俺は部屋に入りながら聞いた
「・・・寝てるのか・・・」
そこには夢の中にいる雪紀がいた
「また、苦しんでる・・・」
怖い夢でも見てるのか
「しゃあねぇな・・・」
俺はまた、雪紀の手を握った
そして雪紀は安心したように笑った
「あの日も、だったな・・・」
俺は昔のことを思い出していた
それは俺が綺香家に来て三年の事・・・
『お兄ちゃん・・・お兄ちゃん・・・！』
『ん・・・雪紀ちゃん？どうしたの？こんな時間に・・・』
『今、怖い夢見たの・・・』
『怖い夢？』
『うん・・・だからね、お兄ちゃんと一緒に寝ていい？』
『でも、それなら椛姉ちゃんのほうがいいんじゃない？』
『ううん、お兄ちゃんと一緒がいい・・・』
『なんで？』
『大きくなったお兄ちゃんがいなくなっちゃう夢を見たから・・・』
『僕はいなくなったりしないよ』
『でも・・・』
『泣かないで雪紀ちゃん・・・』
『うっ・・・うっ・・・』
『とりあえずお布団に入って。寒いでしょ？』

『お兄ちゃんは？』
『僕のことは気にしないで。それより雪紀ちゃんが風邪をひいちゃうから』
『うん・・・お兄ちゃんは入らないの？』
『うん。僕は寒くないから』
『・・・お兄ちゃん・・・』
『なに？』
『手、つないでいい？』
『うん、いいよ』
『・・・いなくなったりしないよね？』
『うん』
『本当に？』
『うん。僕はずっと雪紀ちゃんのそばにいるよ』
『約束だよ！』
『うん！』
あの時の約束・・・俺は守れてるかな・・・
「リュウ？」
「雪紀、起こしちまったか？」
「ううん。それより何でリュウがここにいるの？」
「お前が心配でな。それに・・・」
「それに？」
あの約束守るために・・・
「リュウ？」
「なんでもないよ」
「なんか、暗いね」
お前に言われたくねぇな・・・
「ちょっと考え事しててな」
「・・・リュウはさ前にした約束、ずっと守ってくれてるよね」
「約束？」
「うん、私のそばにずっといるって・・・」

・・・あぁ
「俺はちゃんと守れてんのか？」
「うん、ちゃんと守ってるよ」
「そうか」
よかった・・・
「私、リュウのそういうとこ、好きだよ・・・」
「雪紀・・・」
俺たちはいつの間にか見つめ合っていた・・・
俺たちの距離は少しずつ縮まってき・・・
そして・・・
ジリリリリ・・・！！！
「ご、ごめんなさい・・・」
「お、俺こそごめん・・・」
目覚まし時計が鳴り俺たちは正気に戻った
俺は何やってるんだ・・・
「じゃ、じゃあ俺晩ご飯作ってくる」
「う、うん」
やばい・・・直視できない・・・
「そ、そうだ。お前、おかゆ飽きたっつってたな」
「うん」
「今日は違うの作ってやるよ」
「ありがとう」

三十分後
「出来たぞ～」
「？何で二つあるの？」
「一つは俺の分だ！」
「・・・これ何？」
・・・知らんのか？めずらしい・・・
「卵雑炊（たまごぞうすい）だ。おかゆと違って味がついてるんだ」

「・・・」
「食べないのか？」
「食べさせてっ♪」
・・・おい！
「自分で食えるだろ？」
「リュウの食べさせ方、はまった♪」
「ドラッグかよ・・・やだね！」
俺は言いながら背を向けた
「うぅ・・・」
うっ・・・
なんか視線を感じる・・・
俺はそ～っと振り向いた
「う・・・」
雪紀がうるうるした眼でこっちを見ていた

「お前いつの間にそんな技身につけたんだ？」
俺は雪紀に雑炊を食べさせていた
俺は負けたんだ・・・
「えへへ♪」
「ったく・・・」
しかし誰だってあんな顔されちゃあ断れねぇよな・・・
「お前ここ数日で変わったな」
「そう？」
「あぁ、なんつうか・・・甘えん坊になった」
「それ、ひどい・・・」
ひどいって・・・
「何で変わったんだ？」
「う～ん・・・何でだろ。リュウのせいかな」
「人のせいにするな」
「リュウが甘えさせるからだよ」

俺が？
「そんな事したか？」
「うん。頼ってほしいって言ってたじゃん」
・・・確かに俺のせいだ・・・
「頼りすぎはだめだ」
「でもそう言いながら私に食べさせてくれてるじゃん」
「・・・言うな・・・」
「でも私、リュウのそういうとこも好き♪」
「はいはい・・・」
ったく・・・
そういう事言うなよ
またさっき見たいになるぞ・・・
「空(から)んなったぞ」
「ごちそうさま」
「じゃあ、寝ろ」
「うん。おやすみ、リュウ」
「あぁ・・・」
そして雪紀はすぐに寝た
俺は雪紀の手をとって言った
「おやすみ、雪紀ちゃん」
雪紀の手が微妙に動いた
起きてたのか・・・
「俺も寝るか」
俺はベッドにうつ伏せで寝た

「んん・・・」
俺はゆっくり目を開けた
「朝・・・か」
窓からの木漏れ日が眩しい・・・
「雪紀は・・・？」

雪紀を見ると安心しきった顔で寝ていた
「・・・」
俺はそんな雪紀の寝顔に見惚れていた
・・・かわいいな
「ん・・・リュウ？」
「おぅ、起きたか。熱はどうだ？」
「うん、治ったかも」
「どれ・・・」
俺は手を雪紀の額に乗せた
「治ったようだな」
「うん」
「じゃあ、飯すっか。何がいい？」
「・・・卵焼き」
「わかった！」

「卵焼きお待たせ」
「わーい♪」
「お前、卵焼き好きだよな」
「うん♪」
本当に好きなんだな・・・
「いただきます」
「う～ん・・・おいしい♪」
雪紀はいつもおいしいって言うな
「そりゃどうも」
「あれ？うれしくないの？」
「もう聞き飽きた」
「そんなにおいしいって言ってた？」
「もう何千回と聞いたからな」
まずいって言われるほうがめずらしいぞ
「だっておいしいんだもん♪」

「はいはい」
「ん～♪」

「ごちそうさま」
「おいしかったぁ」
「じゃあおやすみ・・・」
俺はベッドに寄り掛かり寝る体勢に入った
「え？なんで？」
「ここ最近お前のことが心配で寝ようにもなかなか眠れなくてな」
「そう・・・ごめんね」
「気にすんなよ」
「でも・・・」
なんか心配されてるな・・・
「兄が妹を心配して眠れないのは当たり前だから・・・な」
「・・・ありがと」
「ｚｚｚ・・・」
「もう寝てる・・・」
「ｚｚｚ・・・」
「私も寝よ・・・」
雪紀が俺に寄り掛かったような感じがした
なんか・・・照れくさい・・・

それから起きたの５時頃
ふと横に目をやると雪紀が俺にもたれて寝ていた
俺は俺が立ち上がっても雪紀が倒れないようにベッドに寄り掛かけた
そして俺は夕飯の準備をしに行こうと立ち上がろうとして
「ぬわっ！」
何かに引っ張られたような気がした
「雪紀！？」
そう、雪紀が俺の腕をつかんでいたのだ

しかもがっちりつかんでいて離そうにも離れない
寝ているとは思えないほど強くつかんでいる
「・・・リュウ・・・」
吐息と共にかすかに俺の名前を言った
「・・・ったく。しようがねぇな」
もう少しここにいるか・・・
そして俺はまた眠りについた

それから一時間後
「ん・・・」
俺は目を覚ました
「・・・六時か・・・そろそろ飯の準備をっ！？」
立ち上がろうとしてまた引っ張られた
「・・・まだ寝てる・・・」
準備しなきゃなぁ・・・
「雪紀、雪紀・・・」
俺は雪紀をゆすって起こした
「ん・・・リュウ？どうしたの？」
「飯の準備をしたいんだが・・・」
「だが？」
「お前に腕を&#2568 1;（つか）まれてて動けん・・・」
俺は自分の腕を指した
「腕？・・・あ、ごめんなさいっ」
「いいよ、怒ってないから」
「本当？」
「あぁ・・・」
「♪」
「さてと、飯作んなきゃ」
そう言って俺は下に降りて飯を作り始めた

それから約一時間後
「ただいまー、雪紀ちゃん」
「あ、お姉ちゃん。おかえり」
「おぅ、椛」
「おっじゃまっしま～す！」
桜さんは相変わらず元気だなぁ
「桜さんも」
「あれ？家の電気ついてないと思ったら。なんで龍輔君がこっちにいるの？」
「椛に留守にしてる間雪紀の事面倒見とくように命じられたんです」
「そうだったの」
「もう少しあるな・・・」
俺は食卓を見て言った
「リュウ君、私も手伝うわ」
「おぅ、じゃあ頼む」
台所に行ったところで
「ねぇ、リュウ君」
「なんだ？」
「この三日間、雪紀ちゃんとこの家で二人きりだったわね」
何が言いたいんだ？
「あぁ。そうなるな」
「雪紀ちゃんに何もしてないわよね？」
「してねぇよ」
「本当に？」
「疑り深いな・・・何もしてないって」
「そう。じゃあ信じるわ」
・・・なんだったんだ？
食卓に戻って
「今日は焼き魚定食（焼き魚（さんま）、白ご飯、味噌汁、漬け物）

にしてみました」
「おいしそう♪」
「いただきます」

「ごちそうさま」
「おいしかったよ、龍輔君」
「それはどうも」
「あれ？うれしくないの？」
「もう耳にタコが出来るほど聞きましたから」
「そうだっけ」
桜さんもか・・・
「じゃあ、片付けでも・・・」
「あ、いいよ。私たちがするから。ね、雪紀ちゃん」
「え、私も？」
「んじゃ、お言葉に甘えて。またな」
「うん」

家に入り
「ねぇ、龍輔君」
「はい」
「雪紀ちゃんの体調どう？」
「・・・知ってたんですか」
「うん、まぁね」
さすが桜さん
「もう熱は引いてすっかり良くなったようです」
「そう・・・よかった」
桜さんは本当に優しい人だ
「それで、龍輔君」
「はい？」
「本当に雪紀ちゃんには何もしてないよね？」

桜さんまで
「何もしてませんって」
「でもキスしようとしてたよね？」
・・・まさか
「桜さん魔法使ってずっと見てました？」
「うん♪」
・・・隠せねぇぞ、これ
「おやすみなさい」
「あ、ねぇ、龍輔君・・・逃げちゃった」
今日はもう寝るか・・・

その日は疲れていて早く眠った
あの時、俺はなぜ雪紀にキスしようとしたのか分からない・・・
俺はそれを考えないようにした

第五話　終わり

第六話　お化け屋敷の裏の企み

一ヵ月後の十二月
「それじゃあそろそろ決めてもらいましょうか・・・？」
今度はクリスマスパーティの出し物の事が決まっておらず麻河はキレている
「クリパまであと三週間！でもうちのクラスだけまだ何出すか決めてないのよ！？」
「まぁそう騒ぐな委員長よ」
そう言ったのは貴倉だった
てか委員長に向かって何言ってんだ？
「貴倉君？何か案でもあるのかしら？」
「お化け屋敷なんてどうだろうか？」
「クリパにお化け屋敷？」
「そう！」
すげぇ自信ありげだな・・・
「気になるあの子を誘って暗闇ドッキリ空間で二人きり・・・そして密着度は超最大！！」（スーパーマックス）
「スーパーマックス！？」
瑞島がすごい反応をした
目が輝いてる・・・
そうか、こいつこういうエロいの好きだもんな・・・
「俺はそんなお化け屋敷を提案したい」
「一つはお化け屋敷ね・・・他には？」
・・・なし・・・みたいだな
「責任は提案したあんたが取ってよね」
「わかっている」
「では三年二組の出し物はお化け屋敷で決定！」
・・・またか・・・

誰か他の提案してくれてもよかったのに・・・

放課後、音楽室

「よし、じゃあ始めっぞ」

「おぅ」

「ｏｎｅ，　ｔｗｏ，　ｏｎｅ　ｔｗｏ　ｔｈｒｅｅ　ｆｏｕｒ！」

俺たち四人はまたバンドの練習をしていた

「今日は初めから飛ばしてんな！」

「なんかな！わかんねぇけど、そんな気分なんだ！」

「おっしゃ！俺らも飛ばすぜ！！」

はねるような瑞島のドラム

安定した槻嶋のベース

そして恵美（白河から”恵美”と呼ぶように言われている）の澄んだ歌声

今日はそれぞれの音がよく聞こえる

これは、いつもより・・・

楽しい！！！

「ジャン！」

弾き終わり一瞬（いっしゅん）静まりかえった・・・

わっ！！

「今日のはいつもより良くなかったか！？」

「最高だったよね！」

「すっごいカッコよく出来た！」

「あぁ！いつもよりなんか楽しく弾けたぜ！」

こんなに楽しく弾けたのはバンドに入った時以来だ

「じゃあ今日はこれで解散な」

そして学校を出て校門に向かうと

「や、やめてください」

「いいじゃん、いいじゃん。俺たちとどっか行こうよ」
今度はナンパされてる椛がいた
「おい、椛」
「リュウ君！」
「んなっ！？またあいつ・・・」
お、一応俺のことは覚えてるようだな
「またやられちまうよ」
「何言ってんだ！こっちにはナイフがある」
あいつ・・・今度はナイフ持って来やがった
・・・なんか使えるものは・・・
これ使うか・・・
俺は椛に「しゃがめ」のサインを出した
そして・・・
「イッ！」
「なっ、石！？」
俺は石を投げた
しかも奴らの眉間に直撃
俺は椛に「こっち来い」のサインを出した
「なっ！また・・・」
「大丈夫か？」
「うん。ありがとう、リュウ君」
にしてもあいつら・・・！
「俺の妹の次は姉か！」
「あの女あいつの姉！？」
「チッ！今度はお前が逃げる番だ！！」
・・・ナイフか・・・危ねぇな
俺は突き出されたナイフを素手でつかんだ
「なっ・・・！！」
「お前らもあきらめねぇな・・・」
「と、取れねぇ・・・」

ナイフを引っ張ったり押したりすんなよ
痛てぇな・・・
ドスッバキッゴキッ・・・
「あ・・・あ・・・」
「もうここに来んな。わかったな！」
「は、はい！すみませんでしたー！」
また逃げたか
弱いな、ナイフ(こんなもの)に頼るとは・・・
「あ、ありがとう」
「いいよ・・・」
「・・・！！手！大丈夫！？」
「ん？あ、あぁ。こんなのかすり傷だ」
そういいながら俺はハンカチを破り傷口に巻いた
「なんであんな危ないこと・・・」
「なんでって・・・守りたいものは自分犠牲(ぎせい)にしてでも守るのが普通だろ？」
「普通じゃないと思う・・・」
「それにこの傷そんな深くないから一、二週間で治るだろ」
・・・たぶんな
「そう・・・」

次の日
「おい、何だよ話って」
俺は貴倉に呼び出されて屋上の踊り場にいる
「うむ。クリパでお前に協力してほしいことがあるんだが」
「お化け屋敷か？」
「いいや。それは表向きの話だ」
・・・よく分からないが何か企んでいるな
「何しようってんだ？」
「それはな・・・・・」

「は？女子だらけのミスコン？」
「あぁ。どうだ！この企画！」
「・・・てかミスコンってもともと女子だらけじゃん」
「・・・的確なツッコミだな・・・」
・・・ミスコン・・・か
「それで同士森堂にはちょっと協力をして・・・」
「俺は協力はしねぇぞ。そして同士って何のことだ！」
「簡単なことだ。ただイヴの日の午後を空けておくだけでいい」
「へん！協力しねぇっつったろ！だいたい俺はもともとイヴになんの予定もねぇよ！」
「そうか・・・」
なんか考え出した・・・
いやな予感・・・！
「じゃあな！」
「おい！俺は協力しないぞ！」
って聞いてねぇ・・・

午後はクリスマスパーティの準備で埋め尽くされることになった
「はい、じゃあ今決めた係ごとに分かれて作業して！」
「あ～眠・・・」
「森堂君、はい！」
麻河が俺に金の入った茶封筒を渡した
「・・・なんだ？くれるのか？」
ラッキー♪
「違う！！あんた買い出し係でしょ！？それにお金とメモがはいってるから」
「え、マジ！？そんなんいつ・・・」
「いつ！？たった今決まったのにもう忘れたとか！？」
「あー、はいはい。そうでした、そうでした・・・」

俺寝てた時だし・・・
委員長を怒らせると怖ぇ・・・
「龍輔君がつまんなそうだったから」
「私たちが推薦しといてあげたよ♪」
河野(おまえら)と多岐澤かっ！！

「うぅ～寒っ！」
「龍輔君！」
俺が靴を履き替えていると名前を呼ばれた
「恵美か」
「龍輔君も買い出し？」
「寝てる間にそうなってた」
「寝てたんだ・・・」
・・・小声でもはっきりと聞こえてるぞ・・・
「じゃあさ、一緒に行かない？」
「どこへ？」
「買い出し」
「別にいいけど」
「やったぁ♪」
なぜやったぁ？
「恵美たちはクリパで何すんだ？」
「私たちはサンタ喫茶だよ。女子みんなでサンタのコスプレするの」
「へぇ～」
「もちろん私もコスプレするから見に来てね♪」
「時間があればな」
こっちは時間無いかも知れないからな

第六話　終わり

第七話　辛い思い出

デパートのパーティグッズコーナー
「・・・よし！俺の買い物は終わったな」
「そのカセットテープどうすんの？」
「あぁ、俺らの出し物に録音して使うんだ」
「ふーん・・・」
自分から聞いといてふーんは無いだろ・・・
「どうしよっかな～」
「恵美何悩んでんだ？」
「サンタのコスチュームの下地どうしようかなって・・・」
はじめから決めとけよ・・・
「ん？下地？それ手作りにするのか？」
「うん、そうだよ。龍輔君はどんなのがいい？」
「・・・何で俺に聞くんだ？」
「男の子からの視点も取り入れないと」
「・・・まぁ、今は冬だし・・・厚めのにしとけば？」
「つまんな～い」
つまんないって・・・
「何が？」
「男の子なんだから薄めにしてほしい♪とかないの？」
「ない」
「即答！？」
悪いかよ
「冬に薄い服着て風邪ひいたらどうする」
「何とかなるよ♪」
「ならなかった時の事を考えろ」
「・・・わかった♪」
注意されてもこの明るさ・・・

見習いたいよ・・・
「じゃあどうしよっかな～」
「早くしろよ。俺一応急いでんだから」
「うん。じゃあこれにしよっ♪」
「じゃあ早くレジ行こうぜ」
しかし、その量は・・・
「なぁ・・・この量は・・・」
「うちのクラスの女子の人数分だから・・・」
・・・多すぎだ・・・
「・・・いくつか持ってやるよ」
「・・・うりゃ！」
「おぉ！」
持った！！
・・・あれ？
「う・・・キャッ！」
「おっと・・・」
倒れる寸前で俺が支えた
「大丈夫か？」
「あ、うん・・・大丈夫・・・」
「持ってやるって」
「あ、ありがと・・・」
・・・まぁいいや
「大丈夫？」
「たぶん大丈夫だ・・・よし！持てる分は持った！じゃあ帰るぞ」
「うん♪」

「ふぅ～・・・やっと着いたねぇ」
「あぁ・・・結構ここまで長かったな・・・」
買い出ししてから二、三十分以上かかったぞ・・・
「龍輔君もういいよ。ありがとう♪」

「何言ってんだ。この量をお前一人で持てるわけ無いだろ」
「でも・・・」
「いいから。教室まで持って行くよ」
にしてもこれで階段はきついかもな・・・
「やっぱきつかった・・・」
「大丈夫？」
「大丈夫・・・」
「ここだよ」
教室まで行き恵美がドアを開けると
「あ～帰ってきた。遅かったね」
「ごめんね」
「ん？そっちは？」
と言い女子が俺のほうを見た
「俺は森堂だ。森堂龍輔」
「・・・」
顔が赤くなってる・・・？
「・・・まさかその森堂君をはぐらかして荷物持ちさせたとか？」
「え、違っ・・・」
「俺はたまたま同じ買い出し係にされてたまたま一緒になっただけ。荷物持ちも俺が自ら進んでやった事だ」
「・・・ふん。森堂君に救われたわね」
・・・へんな奴だな
「じゃあこれここ置いてくからな」
「あ、うん。ありがとう、龍輔君」

「よぅ、待ったか？」
「森堂。遅かったな」
「わるいわるい」
「はい、それじゃあ作業に戻ってください。森堂君が帰ってきたので必要な物は彼からもらって」

俺やっぱパシリ役だったのか・・・？
「俺は何すればいいんだ？」
「そうね・・・とりあえず雰囲気作りしておいて」
「俺は何をすればいいんですか？委員長・・・」
怖めに言ってみた
「そ、それでいいわ・・・じゃ、じゃあ貴倉君から台本をもらって練習しておいて」
「台本？・・・あぁ、録音するやつか」
「そうよ。じゃ、がんばって」
「はい」

「はい、じゃあ今日はこれで終わりましょうか」
「おい、森堂。帰ろうぜ」
「あ、俺はもう少しこれやってくよ」
俺は今お化け屋敷で使う背景の絵を描いている
「そうか・・・じゃあな」
「あぁ」
・・・
「みんな帰ったか・・・」
みんながいると台本の練習をしても怖いからやめろって言うからなぁ・・・
「ん？あれは・・・」
恵美のいたクラスの奴らだろうな
あいつらも帰りか
それと・・・あの連中はなんだ？
「ま、いいか・・・さて、練習するか」

「五時半か・・・」
みんなが帰ってもう一時間たつ
・・・今日はこれくらいでいいかな・・・

「さてと・・・帰るか・・・」
これ以上いたら警備員の人にしかられるかもしれないからな・・・
「あれ？あそこは恵美のクラス・・・」
みんな帰ったと思ったけど・・・
「何で明かりが・・・」
俺はそのクラスの電気を消そうと中を見た
そこには・・・
「あれ？恵美？何でいるんだ？」
「あ、龍輔君。ちょっとね、裁縫できない人の分、私が作ることになって・・・」
「そんなん手芸部に任せりゃいいじゃん」
「うん、でも手芸部の人たちみんなさっき帰っちゃって・・・」
あの知らない連中は手芸部だったのか・・・
「・・・じゃあ俺、待っててやるよ」
「え？何で？」
「それ時間かかりそうだし、こんな時間に女子を一人で帰らせるわけにはいかないからな」
「ありがとう♪」
「いえいえ」
俺はクラスの外のドアの近くに座り恵美を待つことにした

「君・・・君・・・」
「ん・・・」
誰だ・・・？
「君」
俺は見上げると優しそうなお年寄りの警備員がいた
「あ、はい」
「君、こんな所で寝ちゃ風邪ひくよ」
「あ、すいません」
俺寝てたのか・・・

「もう学校閉めちゃいたいんだけど・・・」
そうか・・・もう閉校(へいこう)の時間（六時）か
「それとあそこの女の子。裁縫に熱中してるけど・・・何のためかね？」
「あれは今度のクリスマスパーティで使う衣装を縫ってるんです。もう少しで終わると思うので・・・」
「・・・わかりました。待ってあげよう」
「！ありがとうございます！」

それから二十分後
「君」
「はい・・・」
あの警備員さんが何か持って来た
「・・・差入(さしい)れ、君の分とあの子の分。おにぎりと温かいお茶だけど」
「あ、ありがとうございます」
「これ、あの子に渡しておいて」
「はい」
この人、優しいな
「・・・君は優しい心を持ってるね」
「え？」
「あの子を待ってあげているんだろ？」
「はい・・・」
「この時間に女の子一人では危ないからね・・・」
この人・・・すごい・・・
「君がいるからあの子はあんなに熱心に出来るんだろうね・・・」
「はぁ・・・」
「まぁなんにしろ、その優しさを忘れちゃいかんよ」
「はい」
「じゃあ、終わったら警備室まで来るんだよ。それまで校門は開け

ておいてあげるから」
「はい。ありがとうございます」
すっげぇ優しい人だ・・・
コンコン・・・
「恵美、警備員の人が差入れもって来てくれたぞ」
「え？やった～♪」
「とりあえずこれ食って早く終わらせろ。今、六時半だ」
「あ、うん！わかった！」

その頃、綺香姉妹は森堂家にいた
「リュウ、遅いね」
「そうね・・・先食べちゃいましょ」
「うん」

約一時間後・・・
コンコン・・・
「すいません」
「終わったの？」
「はい。ありがとうございました」
「それと差入れも・・・」
「いえいえ。がんばってたからね」
俺たちは校門まで行き・・・
「じゃ、気をつけるんだよ。夜道は危険だからね」
「はい。ありがとうございました」
警備員さんは学校へと戻っていった
「親切な人だったね」
「あぁ、そうだな」
本当に・・・
「じゃあお前の家どっちだ？」
「ん？あっち・・・」

あっちか・・・
「じゃあ家まで送るよ。家同じ方向だし」
「！！・・・・・いいよ。一人で帰れるから」
「でもこの時間に一人じゃ危ない」
「でも・・・」
「この時間にはナンパしてくる奴や暗いの利用してどっかに連れ込む奴なんかがいるからな」
「・・・・・・」
躊躇(ちゅうちょ)してるな・・・
俺が何かすると思ってんのか？
「・・・俺は何にもしねぇよ」
「・・・本当に？」
「あぁ」
「じゃあ家まで送って」
「わかった」
・・・・・・・
「・・・前になんかあったのか？」
「え？」
「俺が送るって言ったらなにかを思い出したような顔したから」
「・・・うん・・・ちょっとね・・・」
・・・なんかためてるな・・・
「俺でよかったら話してみろよ。スッキリするかもよ？」
「・・・・・・二年前にね今日と同じようなことがあったの・・・
あの日も私は遅くまで残っててそれで帰ろうとしたとき男の子が
『俺が家まで送るってやるよ』
って言われて・・・それで私送ってもらおうと
『お願いします』
って言ったの・・・そしたらその男の子が私の家じゃなくて自分の家に連れて行って私を無理矢理連れ込もうといたの・・・それであんまり男の子の事信じられなくなっちゃって・・・」

「・・・そうか・・・」
辛かっただろうな・・・
「・・・なんか龍輔君に聞いてもらったらちょっとスッキリしちゃった♪ありがとね♪」
「どういたしまして」
しばらく歩いているとT路地に入った
「・・・お前の家どっちだ？」
「こっちだよ」
俺は恵美に案内されて歩いた

「ここだよ」
「ここって・・・俺ん家の近くじゃん」
「そうなの？」
「あぁ。俺ん家は・・・ここから2ブロック向こうの角を右に曲がった所だ」
こんな近所に住んでたんだ・・・
「へぇー・・・今度遊びに行ってもいい？」
「いいけど・・・来る時は前もって教えてくれよ」
「うん。・・・じゃあ学校で・・・」
学校・・・！！
「それはだめだ」
「何で？」
「恵美はうちの学校のアイドル的存在。お前が俺ん家来ると知れば学校にいるお前のファンが家に押し寄せてくる・・・そしたら大変なことになるし、お前もそれはそれで迷惑だろ？」
「うん・・・じゃあどうやって・・・？」
ん～・・・
「・・・携帯持ってる？」
「うん」
「じゃあ俺のメールアドレス教えとくからメールで朝、授業が始ま

る前か放課後に」
「わかった」
互いにメアドを交換し、確認をした
「ありがとね♪」
「あ、あぁ・・・」
なぜありがとう・・・？
「じゃまた明日ね」
「あぁ」

俺は家へ帰りそしてそのままベッドに倒れた

第七話　終わり

第八話　クリスマスパーティ

クリパ当日
まず桜さんの開会の言葉
桜さんはこの学校の学園長である
「あー、あー。みなさん、おはようございます。今日は天気にめぐまれてよい日になりそうです。楽しみにしていたからと言ってあまりハメをはずし過ぎないように。それではここに、桜丘学園、クリスマスパーティを開催します！」

「リュウ君！一番乗りできたよ！！」
「ここは竹林の中に出来た墓場・・・ここを女の子が一人で通ると現れると言う妖怪がいる・・・その妖怪の名は霊魂食い（れいこん）・・・霊魂食いは普段は死んだ霊の魂を食うが時に来る女性を襲っては殺し魂を食うと言われている・・・」
・・・カチッ・・・
「・・・よし、上出来だ！」
「ふぅ・・・」
どさッ・・・
「ん？誰か倒れ・・・」
「椛先輩！！」
声の上がった方へ行くと椛が倒れていた
「・・・気絶してる・・・今のナレーション聞いたな」
表に準備中の看板があるのに・・・
「お前のは怖さありすぎなんだよ」
ないとつまらんだろ・・・
「誰か椛を保健室へ」
「俺ッ！俺行く！！」
こいつは・・・

「・・・槻嶋、河野、多岐澤。頼む」
「う、うん」
「は～い」
「わかったわ」
あいつらなら心配ないだろ
「連れて行ったら保健室の先生に任せてすぐ戻って来いよ」
「了解」
保健室の先生は女だから任せて大丈夫だな
「じゃあ続きするか」
「次はこれだ」
男子が一人で来たときのか
「録音スタート」
カチッ・・・
「・・・ここは林の中に出来た墓地・・・ここに男が一人で来ると、ある霊がその男を殺すと言う・・・その霊の名は朱鷺羽紗枝（ときわさえ）、絶世の美女と言われる程の美しさだった女性（ひと）・・・その美女は愛していた男と結ばれた・・・だがその男に外国へ売られ、殺された・・・それから男が許せずその魅力を使い、誘ってそして男を殺していったと言われている・・・」
・・・カチッ・・・
「・・・じょ、上出来だ・・・」
「・・・何やってんだ？お前ら」
「い、いや・・・その・・・」
「話を聞いてたら・・・な」
貴倉まで・・・
「お前が作った話だろ・・・？」
「そ、そうだが・・・」
「情けねぇなぁ・・・」
「お前は自分が話してるから怖くないんだ！」
・・・・・・

「俺だって最初は自分で話してても怖かったぞ？でもそのうち慣れて来てな。それでお化け屋敷とかが全然怖いと思わなくなっちまってな・・・」
「もういいよ・・・」
「・・・次」
「これだ・・・」
・・・男女で来たときのか
「録音スタート・・・」
カチッ・・・
「・・・ここはアメリカのある林の中に出来た墓場・・・ここを男女で来るとある女性の霊がその二人をを殺してしまうと言われている・・・その霊の名はバルト・キャロル・・・彼女は愛していた男に家を燃やされ顔がただれ死んでしまった・・・それから霊になってしまった彼女は男と幸せそうな女を憎み、殺し、そして自分と同じように顔をただれさせたと言う・・・」
・・・カチッ・・・
「・・・・・・・・・」
「・・・お前らみんな何やってんだ？」
みんな部屋の隅のほうに行って・・・
「・・・・・・・・・・・・・・」
「・・・もういいや・・・はじめようぜ」
「・・・じゃ、じゃあ、だ、誰がそれぞれの役、する・・・？」
「朱鷺羽紗枝は多岐澤、キャロルは河野でどうだ？」
「い、いいわ」
「お、オッケ～」
・・・そんな怖かったか？
「霊魂食いは誰がする？」
「お、俺！」
瑞嶋・・・いきなり元気に・・・
「霊魂食いは森堂に任せる。で、控えは委員長、頼む」

「わ、わかったわ・・・」
・・・委員長でいいのか？
「じゃ、じゃあお化け屋敷始めるわよ・・・・」
たくさんの客が来てそのあと雪紀が来た
「・・・・・・・・」
雪紀もやっぱり怖いか・・・
「・・・・・・・・・・・・」
「ぁぁぁぁ・・・・・・」
「ひッ・・・・・・・」
何だよこいつ・・・結構怖いんじゃん
「ぁぁ・・お前の魂・・・いただく・・・・」
「・・・ど、どうせリュウなんでしょ！？お、脅かしたってそうはいかないんだから！」
「魂・・・いただくぞ・・・・！！」
俺は雪紀の言うことは無視した
「ぅ・・・」
雪紀は走るが・・・
「こっちこっち」
かすかに誰かが案内してる
・・・この声は瑞嶋か・・・
「ひッ・・・」
俺は雪紀が瑞嶋の所を過ぎたところで・・・
「お前何やってんだボケッ！！」
小声で瑞嶋に喝を入れて殴った
「わ、わるい・・・」
次に恵美が来た
「・・・？」
・・・あんまり怖くなさそうだな・・・

「あああああああ・・・・・・」
「ん？」
「ぁぁぁ・・・お前の魂・・・いただく・・・」
「・・・」
怖がってくれよ・・・
「魂・・・いただくぞ・・・・！！」
俺が恵美に近づいたら・・・
「キャーーーーーッ♪」
こっちに抱きついてきた
「ばっ、何やってんだ！！」
「えへへ♪」
「えへへじゃねぇ、離れろ！」
離れねぇ・・・
これじゃお化け屋敷にならねぇじゃねぇか

「よぅ同志森堂よ。ちょうどいい怖ろしさだな」
「同志って何のことだ。そしてお前今までどこいってやがった」
「ちょっとな」
「はいはい」
言いたくない訳か・・・
「森堂は休憩しててもいいぞ」
「あ？俺の代わりは？」
「委員長がやってくれる」
・・・大丈夫かな
「森堂もさすがに疲れただろ。息抜きして来い」
「あぁ・・・ま、サンキューな」

とは言ったものの・・・
「何すっかな・・・」
恵美のサンタ喫茶も一人で行くのはな・・・

「ねぇ、あんなことしてよかったの？」
「いいのよ。あいつ調子に乗ってるし、少しはこらしめた方がいいの。ま、あれで反省するでしょ」
・・・いじめ・・・か
女子のいじめは半端じゃないって聞いたな・・・
たいした事じゃないといいけど
「ん？」
音楽室に誰か・・・
「！め・・・」
「ぐすん・・・」
！！
泣いてる・・・
「！・・・あ、龍輔君。どうしたの？」
泣いてる所は見られたくないよな・・・
「恵美こそここで何してる？」
「け、景色がいいから・・・」
・・・我慢して・・・
辛そうだな・・・
「悩み事か？」
「え？」
「聞くぞ。言いたければ」
「・・・ちょっとね。私、クラスの人にモテるからって調子に乗ってるって言われて・・・そんな事、言われるの初めてで・・・それでここにずっといろって・・・」
・・・さっきの・・・
「それで・・・どうしたらいいかわからなくて・・・」
辛いだろうな・・・そして・・・
・・・泣きたいのに・・・泣きたいのをこらえてる・・・
「・・・ほら、こっち来い」
「え？ちょっ、なっ・・・」

俺は恵美を抱き寄せた
「恵美」
「え？」
「楽しくて笑いたい時は、笑えばいい。むしゃくしゃして怒りたい時は、怒ればいい。心がしずんで泣きたい時は、泣けばいい。我慢しないで、自分の心に正直になればいい」
「・・・・・・」
「・・・恵美が悲しそうだから俺は悲しい訳を聞いて、それで恵美の心が少しでも晴れるなら俺はいつでも聞いてやる」
「龍輔君・・・」
我慢するな・・・
「泣きたいのに泣けない奴はいない・・・我慢してるだけ・・・でも、我慢しないで泣いてみれば、その先に新しい道が出来るかも知れない・・・」
「ぅ・・・ぅ・・・」
「恥ずかしがらないで、自分に正直に・・・」
「ぅ・・・ぅ・・・うわ～ん・・・ひっく・・・うっ・・・うっ・・・」
我慢しないで・・・泣けばいい・・・
「よしよし・・・」
「うっ・・・うっ・・・ひっく・・・うっ・・・龍輔君（りゅうすけくん）・・・」
「ん？」
「うっ・・・ひっく・・・ありがとう・・・」
「どういたしまして・・・」
「うっ・・・ううっ・・・うわ～ん・・・」

「・・・・・」
「どう？泣いて少しはスッキリした？」
「うん・・・ありがとう・・・」
「どういたしまして」

だいぶ赤いのが引いて来たな・・・
「じゃ、俺はそろそろ・・・」
「ねぇ・・・龍輔君」
「ん？」
「今の事・・・黙っておいてね・・・」
「わかってるよ」
「・・・ありがとう」

俺は音楽室を出て・・・
「何すっかな・・・」
まだ何するか考えていた
「ん？お、雪紀！」
俺はちょうど一人で歩いている雪紀を見つけた
「あ、リュウ」
「何してんだ？」
「ちょっとね、一緒に回る人いないから一人でぶらぶらと・・・」
「ふ～ん・・・ん？」
なんか視線を感じる・・・
「あれは・・・同じクラスの酒乃（さかの）さん」
「・・・お前のこと見てるのか？」
「違うよ・・・リュウの事見てるの」
・・・は？
「・・・何で？」
「リュウ知らないの？」
「何が？」
「リュウはうちのクラスですごい人気あるんだよ？優しくて、強くて、体を張って守ってくれて、かっこよくてって・・・」
・・・しらねぇし・・・
「・・・俺、お前のとこのクラスの奴知らんぞ？」
「学校中でうわさされてるよ・・・」

「は？」
「この前お姉ちゃんがナンパされてる所助けたんだって・・・それで相手がナイフを持ってるのにもかかわらず素手でつかんで守ったんだって」
・・・みんな見てたのか・・・
「でもそれ普通だろ？」
「普通は逃げるよ・・・」
ふーん・・・
「ま、いっか。それよりどうだ？」
「何が？」
「一緒に回ろうぜ。どうせ退屈だろ？一人でいても」
「私？」
「あぁ」
「私でいいの？」
何で聞くんだ？
「だめか？」
「・・・だめじゃない・・・」
「じゃあ行こうぜ」
「うん」

俺たちはいろいろと回った
手芸部、屋台、美術部、などなど・・・
「さて・・・次どこ行く？」
「・・・あ、ねぇ、あそこの喫茶店は？」
「ん？いいけど」
恵美のとこ以外に喫茶店してるとこがあったんだ・・・
「何にいたしますか？」
「・・・俺はコーヒー」
「私はケーキセット」
「かしこまりました。ごゆっくりどうぞ」

・・・丁寧でなんか変・・・・
「お待たせしました」
早い・・・
「では・・・ごゆっくり・・・・」
「いただきます」
「・・・おいしい」
「うまい・・・・」
温まる・・・
「・・・あ、もうこんな時間！」
「こんな時間って・・・・」
まだ１２時４０分だけど・・・・
「じゃ、じゃあ私行くね」
「どこに？」
「体育館。来ないでね！」
「はいはい」
・・・体育館か・・・・
何かあったかな・・・・
「ま、いいか。ごちそうさま」
「ありがとうございました」

体育館では・・・
「さぁ、これから始まるのは男子にとって最高のショー！！！」
「あの司会者が一番盛り上がってるな」
「あぁ・・・・」
「これより！女子のミスコンを開催する！！」
うおぉーーーーーーーー！！！
「体育館は賑やかだなぁ・・・・」
外まで聞こえてる・・・
「よぅ、同志森堂よ」

「だから同志って何の事だよ！」
「お前のおかげでミスコンがより豪華に出来たぞ」
あ？
んだと？
「俺は協力するなんて言ってねぇぞ！」
「イヴ、ミスコンが終わった後に予定が無ければそれでいいんだ」
「殴られたいか？」
「遠慮する。さて、俺も本格的に動くとするか」
「ふ～ん、なるほどね。私の読みは当たってた訳だ」
この声は・・・

「さぁここらへんで出場者の意気込みを聞いてみよう！まずは生徒会長、椛先輩から！」
「え、え！？わ、私！？」
「お姉ちゃん。そんなに緊張しなくても普通でいいと思うよ」
「う、うん・・・ふぅ・・・あ、あの！ふ、不束者ですが、お願いします！！」
よ、よろこんで・・・
「！！お姉ちゃん何言ってるの！？」
「え！？だめだったかな・・・」

「智恵先輩！？」
「やっ、弟君」
この人は奈津河智恵
椛と同じ生徒会の一人で副生徒会長だ
俺のとこを弟君と呼ぶ人の一人でもある
「・・・その言い方やめてくれませんか？」
「いいじゃん。呼びやすいし、呼ばれたらすぐ気がつくでしょ？」
「で、智恵先輩が何用で？」
「貴倉君！あなた、ミスコンを囮に何か企んでるでしょ」

「ふっ・・・さすがは副生徒会長、智恵先輩だ」
すげぇ・・・生徒会は違うな・・・
「あなたもミスコンに誘うべきだった」
「私は誘われても行かないわよ。それよりよく椛をミスコンに出させたわね。彼女は一番ああいうの嫌いなのに・・・いったいどんな小細工を使ったのかしら？」
「椛先輩に小細工は使ってはいない。むしろこいつを使えば・・・」
「なるほど・・・それなら納得・・・」
・・・貴倉め・・・
「あ、逃げた！」
「待てーーーっ！！」
智恵先輩追いかけて行っちゃった・・・
「貴倉は逃げ足速いからなぁ・・・追いつくかどうか・・・」
・・・ミスコンか・・・
「・・・行ってみるか」

「さぁ、水着審査が終わり、コスプレ審査を終えて今！優勝者が決まる！」
水着審査にコスプレって・・・どんなミスコンだよ・・・
「さぁ！優勝者は！！」
「今終わるところか・・・」
「・・・生徒会長、綺香椛先輩！！」
「え！？私！？」
パチパチパチ・・・・・
「ありがとう・・・あ、リュウ君！やったよ！」
「おめでとう！！」
「さぁ、椛先輩には賞品が渡されます」
へぇ、学校でやるミスコンにしちゃ準備がいいな
「賞品は桜丘テーマパークのチケットを４枚」
・・・意外と豪華・・・

「と、」
・・・と？
「森堂龍輔君をこのミスコンが終わった後、自由にしてもいいとのことです」
何だと！？
「おい、瑞島！！」
「！は、はい・・・なんでしょうか森堂君・・・」
「貴倉はどこだ！！」
「ま、まぁいいじゃねぇか」
・・・・・・
「どけ・・・」
「女の子と一日一緒にいれるんだぞ？」
タッ・・・タッ・・・タッ・・・
「男としてうれしくないのがッ！！」
俺は瑞嶋に跳び蹴りを喰らわせた
「貴倉はどこだ！！！」
「こらっ！リュウ君！！」
「あ！？」
「暴力はいけません！！」
・・・・・・・・・チッ！
「わかったよ・・・」
「おぉ！」
「あの森堂が止まったぞ！」
「さすがは椛先輩・・・」
あいつらいろいろ言いやがって・・・
「ぶっ飛ばされてぇか！！俺は今虫の居所が悪いんだ！！」
「こらっ！！」
「・・・チッ！」
「おぉ！」
「あ！？」

「・・・・・・・・・・・・・・・」
ったく・・・
「そ、それじゃあミスコンを終了します・・・解散・・・」
・・・跳び蹴り、きつ過ぎたか？
「じゃあ、リュウ君。行こ♪」
「ん？ん！？な、ちょっ、おい！」
椛は俺の腕をつかんで走り出した

「まったく・・・人の腕をつかんで走り回って！おかげで大怪我する所だ！！」
「・・・ごめん」
「・・・もういいよ。俺も悪かった。もうするなよ」
「うん・・・」
・・・は～あ
「んで？どこ行く？」
「え？」
「今日は俺を自由に出来るんだろ？」
「！うん♪」
・・・よかった
笑った・・・
「ねぇ、リュウ君」
「ん？何？」
「手、つないで」
「・・・拒否権は？」
「なし」
即答・・・
「・・・わかったよ」
ギュッ・・・
俺は椛の手をとった
「これでいいですか？椛様」

「そんな言い方しなくていいよ・・・」
「わかった。これでいい？椛」
「うん、ありがとう」
・・・こっちははずいんだけど・・・
「ふふッ・・・♪」
まぁいいか・・・椛は喜んでる
「で？どこ行く？」
「じゃあまず美術部は？」
「うん、いいよ」
さっき行ったんだけどな・・・

それから俺たちはいろんなことに行った
「あ～、楽しかった」
「そうか」
「あ、ねぇ。最後にあそこ行こ♪」
あそこは・・・
「あぁ、いいよ」
俺たちが最後に入ったのは恵美のサンタ喫茶
「いらっしゃ、あ、龍輔君」
「よぅ」
「来てくれたの？」
「まぁ、な」
その言い方はちょっと・・・
「リュウ君・・・恵美さんとどんな関係なの？」
やっぱり・・・
「恵美とは同じ軽音楽部のバンドのメンバーだよ。こいつはボーカル担当」
「じゃあ何で恵美って言ってるの？」
「こいつが白河じゃなくて恵美って呼べって言ってるから」
「本当に何にも無いの？」

・・・椛の目が本気(マジ)だ・・・
「何にも無いって」
「よかった」
「何が！？」
「ううん」
・・・分からない・・・
「じゃ、じゃあとりあえず席に・・・・」
「ありがと♪」
思考の切り替え早い・・・
「俺コーヒー」
「私は・・・ケーキセットと紅茶」
「はーい」
頼む物は姉妹同じなんだ・・・
「ねぇ、リュウ君」
「ん？」
「今日、楽しかったね」
今4時か・・・
「・・・何言ってんだよ」
「え？」
「今はまだ4時だ。椛が俺を自由に出来るのはこのクリパが終わるまで。クリパは5時に終わる。あと一時間は俺を自由に使えるんだぞ？そのあと一時間を何もしないで潰すのか？それとももう少し回るか？」
「・・・じゃあもう少し回る」
「だろ？」
ま、そう言うと思ってたけど・・・
「お待たせ～。ケーキセットとコーヒー、紅茶です」
「いただきま～す♪」
「・・・このコーヒーうまいな」
「でしょ？」

自信あったのか
「ねぇ、椛先輩」
「何？白河さん」
「椛先輩がミスコンで優勝したんでしょ？賞品は何だったの？」
やっぱり気になるのか？
「桜丘テーマパークのチケットを４枚と」
「と？」
「俺だとよ」
「え？」
聞き返すな！
「優勝者は俺を自由に使えるってさ・・・」
「・・・へぇ・・・」
「優勝者が椛でよかったよ・・・」
「何で？」
「もし優勝者が河野や多岐澤だったら何させられてたか・・・」
考えるだけでゾッとする・・・
「ま、まぁ・・じゃあ、ごゆっくり・・・」
「あぁ・・・」
本当に椛が優勝者でよかった・・・
「ねぇ、リュウ君」
「何？」
「はい、あーん」
「・・・何で」
「だってまだ私が自由にしていいんでしょ？だから、はい」
こいつ・・・
「拒否権は？」
「なし♪」
これもまた即答・・・
「拒否したら？」
「ぅ・・・」

椛がうるうるした瞳でこっちを上目使いで見てきた
こいつもこんな技使いやがって・・・
「わかったよ！」
「♪・・はい♪」
「あむ・・・」
いくら椛でも人前でははずいよな・・・
・・・ケーキ・・・甘いな・・・

「なぁ、俺らのとこのお化け屋敷来るか？」
「え・・・お化け屋敷・・・？」
「最初に来た時すぐ気絶してたからさ」
「でも・・・」
やっぱりあの手は嫌いか・・・
「じゃあ違う・・・」
「行く！」
「・・・え？」
「お化け屋敷、行く！」
・・・挑戦、か

「よぅ」
「森堂？どうした？」
見ればわかるだろ・・・
「客として来た」
「椛先輩とペアか」
「あぁ、そうだ」
「では、お気をつけて」

「・・・大丈夫か？」
「ぜ、全然・・・」
「だめだな」

「う・・・」
やっぱり来ない方がよかったんじゃ・・・
「リュ、リュウ君・・・」
「何？」
「そ、その・・・だ、だだ、だ、抱き付いても、い、いい？」
こいつ相当怖がってんな・・・
「いいよ」
「あ、ありが、とう・・・」
「いえいえ」
ギュッ！
椛が俺の腕に思いっきり引っ付いて来た
「大丈夫か？」
「こ、こうしてれば、す、少しは・・・」
「そうか・・・」
椛も生徒会長してたって怖いものは怖いんだよな・・・

「ほら、椛。終わったぞ」
「う、うん・・・ありがと・・・」
そう言って俺の腕を離した
「どういたしまして」
「・・・・・」
今、４時２４分か・・・
「リュウ君・・・もう少し、私に付き合って」
「・・・わかってるよ」
椛の事だからそう言うと思った・・・

「ん～っ♪だいぶ満喫したね」
「あぁ、そうだな」
今、４時５７分か・・・
「リュウ君」

「ん？」
「体育館の裏行こ」
「いいけど・・・」

「もう時間過ぎるぞ」
「・・・最後の一つ」
「拒否権は？」
「・・・あり」
・・・あり、か
「何？」
「その・・・えっと・・・」
早くしないと時間が過ぎる
「・・・早く」
「・・・・・・」
「・・・・・・・・・時間過ぎたぞ」
「・・・・・・・・・じゃ、じゃあもう・・・・」
あきらめ早いなぁ・・・
「最後の一つだろ？」
「え？」
「最後の一つ分、延長な」
「・・・・・・じゃ、じゃあ・・・・その・・・・」
やっぱり長引きそうだ
「・・・・・・・・言うよ・・・・」
「おぅ」
「・・・・・・・・・・・・ほっぺに、キス・・・・して・・・・」
「・・・・・それだけ？」
「うん・・・・」
顔が真っ赤・・・
「拒否権・・・ありだから・・・・」
「・・・わかってるよ」

俺は言いながら椛の方へ足を進ませた
「なしでもよかったけどな・・・」
「え・・・？」
「頬（ほほ）にキス、だろ？」
それくらいならかまわねぇよ
・・・チュッ・・・
「これでいいか？」
「・・・・・・・うん・・・・・・・」
「じゃあ俺行くから」
「・・・うん、ありがとう」

「じゃあ、片付けも終わったので、今日はもう解散」
「じゃあな」
「おぅ、またなぁ」

クリパが終わり、後は冬休みを待つだけ・・・
冬休みに何があるのか・・・楽しみだ

第八話　終わり

第九話　冬休み

クリパが終わって一週間後
桜花島には雪が降り、桜丘学園は冬休みに入り
「ねぇ、リュウ君」
「ん？何？」
俺たちは家でくつろいでいた
「テーマパーク行かない？」
「・・・俺が行かなくても他に誘う奴いるだろ？」
「いいじゃん、リュウ！行こうよ！」
「俺、寝てたい」
「龍輔君、冬休みになってから寝てばっかりだよ？少しは動かないと」
確かにそれはそうだけど・・・
「わかったよ、俺も行くよ・・・で、もう一人はどうするんだ？」
「・・・どうしよう・・・」
考えてなかった・・・と
「桜さんはどうですか？」
「僕はやる事があるから・・・」
「仕事・・・ですか？」
「うん・・・ごめんね」
別にあやまらなくても・・・
・・・ところで・・・
「・・・桜さん、質問があるんですが・・・」
「なに？」
「何で家に白河恵美がいるんですか？」
すっげぇ気になる！
何で家にいるんだ！？
「お家の事情でこの冬休みの間、家で預かる事になったの」

「え！？リュウ君と白河さんが」
「一つ屋根の下で暮らすの！？」
さすが姉妹
息がそろってる
「大丈夫だよ、僕もいるから」
「でも・・・」
「あの、すいません。私、急に・・・」
「あ、ううん。白河さんじゃなくて・・・」
「うん、そうだよね・・・」
なんか寒気がするな
「リュウ君、白河さんに手を出さないでよ」
「信じてるからね」
怖ぇ・・・
「わかってるよ」
「みんな仲良く出来そうだね♪」
・・・そうは思えない・・・
「あ、若い男女が一つ屋根の下で暮らすのはあんまりいい事じゃないから出来るだけ秘密にね！」
「はーい」
・・・やっぱり思考の切り替えが早い・・・
「そうだ。恵美を誘ったら？ここにいるんだし・・・」
「・・・うん、そうだね」
「いいんですか？」
「行こうよ。せっかく４枚あるんだし」
「ありがとうございます♪」

「龍輔君。僕、お腹すいたなぁ」
もう１２時か・・・
「昼ご飯の準備してきます」
「うん」

「リクエストは？」
「僕、魚がいいな」
「わかりました」
俺は台所へと足を運んだ
「？？？」
「どうしたの？白河さん」
「料理はてっきり椛先輩と雪紀さんが作るのかと思って・・・」
「うん、私たちも料理はするけどリュウ君ほど上手に作れないから・・・」
「龍輔君って料理上手なの？」
「うん！ずっごく！」

「お待ちどうさん」
「うわぁ、おいしそう！」
「いただきます」
恵美がいきおいよく魚を食べた
「・・ん～っ！おいしい！」
「それはどうも」
「喜ばれてうれしくないの？」
「リュウ君ね、もうその言葉は聞き飽きたんだって」
耳にタコとはこのことだな
「ふーん・・・」
「でもおいしいからわかっててもついおいしいって言っちゃうんだけどね」
「・・・ごちそうさま」
今1時か・・・
俺は食器を台所に持って行って・・・
「じゃ、おやすみ」
「うん、おやすみ龍輔君」
俺は自室に戻った

「もう寝ちゃうの？」
「うん。最近そうなんだ・・・立て続けのイベントとその間のテスト勉強で疲れてるのかな・・・・」
「龍輔君も大変なんだ・・・・」

・・・今何時だ？
「・・・3時か・・・・」
いつもより早く起きたな・・・・
俺は下に降りて・・・
「おっす・・・・」
「あ、リュウ。今日は早いね」
「あぁ・・・・」
台所に行き・・・

一時間後・・・
「デザート・・・いるか？」
「うん♪」
眠い・・・
「それぞれ好きなの取って・・・・」
「リュウ君のは？」
「俺は眠気覚ましに散歩してくる」
「いってらっしゃい、龍輔君」
「あい・・・・」

・・・だいぶ、目ぇ覚めてきたかな
「ん？」
「うぅ・・・ひっく・・・うっ・・・うっ・・・・」
あの女の子・・・どうしたのかな・・・
「どうしたの？」
「うっ・・・ひっく・・・ママ、と・・・はぐれ、ちゃった、の・・

・」
「そう・・・立てる？」
「うっ・・・ひっく・・・足、痛いよぅ・・・・」
足、けがしたのか・・・
「お兄ちゃんにおぶさりな」
「ひっく・・・で、も・・・ママ、が・・・・」
「一緒にママを探してあげるから」
「うっ・・・ひっく・・・うっ・・うぅ・・・・」
俺は女の子をおんぶして歩いたが・・・
わからねぇ・・・
という事で俺は交番へ行くことにした
「すいませ～ん」
「あ、はい。少々お待ちを・・・」
先客あり、か・・・
・・・この子、寝ちまったな・・・
「それで、その子とはどこで？」
「それが、わからないんです」
・・・迷子、かな・・・って
ん？
「あの・・・今、迷子の女の子を連れて来たんですが・・・」
「え！？」
「この子がそうでしょうか？」
俺はおんぶしたまま女の子を見せた
「・・・志穂！」
「ん・・・あ、ママ！」
俺は女の子を母親に渡した
「志穂・・・よかった・・・」
「ママ、ごめんなさい」
「いいのよ・・・」
よかった、よかった

「それじゃ、俺は・・・」
俺が交番を出ようとして
「あ、あの、ありがとうございます」
「いえいえ・・・俺は別に・・・」
「何かお礼を・・・」
「いいですよ、俺が善意(ぜんい)でした事ですから」
俺はそう言って交番を出た
「本当に、本当にありがとうございました！」

「ただいま」
「あ、おかえり、リュウ」
「あれ、今日はお前らが作るのか？」
「うん、いつもリュウ君に作ってもらってるから」
そういえば、そうかもな・・・
「・・・何かいい事あった？」
「何で？」
「リュウの顔、なんかうれしそう」
「そうか？」
「うん」
なら・・・あの母子(おやこ)の姿を見て・・・
「リュウ？何かあったの？」
「あぁ・・・ちょっとな・・・」

俺はあの母子の姿を心にやき付けた
あんな母さんだったのかな・・・
俺の母さんも、優しい人だったのなら、いいな・・・

第九話　終わり

第十話　桜丘テーマパーク

「早く来ないかなぁ・・・あ、来た来た。おーい」
「ごめんお姉ちゃん」
「ううん、いいよ・・・あれ？リュウ君は？」
「それが・・・」
「ん？」
「一応起こしてから来たんだけど・・・」
「・・・また寝たかも・・・」
「あらら・・・」

ん・・・今、何時だ・・・？
「１０時か・・・！やっべ遅れた！！」
１０時集合なのに！

「・・・遅いね」
「もう１０分過ぎたよ」
「もうすぐ来るよ・・・きっと」
「白河さんそればっかりだよ？」
タッ・・・タッ・・・タッ・・・
「悪い！遅れた！！」
「本当だよ」
「女の子を三人、１０分も待たせて・・・」
やばい・・・機嫌損ねてる・・・
「飲み物おごるよ」
「いいの？」
「あぁ・・・」

ガコン！

「雪紀がホットココアで、椛が温かいお茶、そして恵美はミルクティーだな。はい」
「ありがとう」
「で、それ飲み終わったらどれ行く？」
「じゃあ、これから乗ろ」
空中ブランコか・・・
「大丈夫なのか？」
「何が？」
「・・・スカート」
「・・・・・・」
「スカートが捲(めく)れてもいいって言うなら乗るが？」
「じゃあどれに乗ろうか！」
考えてなかったな・・・
「リュウ」
「ん？」
「なんかつまんなさそうだね」
「あ～そうか？」
そんなつもりは無いけど・・・
「うん・・どうしたの？」
「特に何もねぇよ・・つまんなくもねぇし・・・」
「ふーん・・・じゃあ気のせいかな」
・・・気のせいか
「決まったよ～！」
「お、どれに行くんだ？」
「これ♪」
・・・これって・・・
「椛・・大丈夫なのか？お化け屋敷・・・」
椛がすごい暗いけど・・・
「・・・うん・・・」
「・・・・・違うのしようぜ。全然大丈夫には見えねぇから」

「だ、大丈夫だよ・・・」
「お前から死相が見えるけど？」
「・・・だ、大・・丈・・夫・・・」
どんどん落ち込んで行くなよ・・・
「そんなに行きたいか？」
「・・・・・」
椛がゆっくりうなずいたが・・・
やっぱり死相が見える・・・
「・・わかったよ・・・行こう。怖くなったら俺の腕、掴んでいいから」
「・・・うん」
「ただし掴むだけだからな。引っ付いてくるなよ」
動きにくいったらありゃしない・・・
「うん・・・」
「怖くなったらお前らもいいぞ」
「は～い」

「キャーーーーーッ！！！」

「ほら、もう出たぞ」
「ほ、本当？」
「あぁ・・・」
「・・・怖かったぁ・・・」
怖いくせに入るから・・・
「椛、今度からお化け屋敷に入る時のルールだ。よく聞け」
「うん」
「1．　あんまり俺に引っ付くな。2．俺の耳元で叫ぶな。この二つは俺がいる時だけ。そして次が一番重要だ」
「うん・・・」
「3．・・怖いなら入るな！！」

「・・・・・はい・・・・」
・・・悲しげにうつむくなよ・・・
「ちょっ・・リュ・・・」
「悪かったよ・・・今のは俺が言いすぎた・・ほら次行こうぜ」
「・・・うん・・・」
・・・ったく・・・
「・・龍輔君って時々恐いけど・・すっごく優しいよね」
「うん。私の自慢の兄さんだよ・・・」
「おーい。二人は来ないのかー？」
「あ、待って～」

その後、俺たちはいろいろなアトラクションに乗った
「楽しかったねぇ」
「うん！」
俺たちがテーマパークの出口に向かっていると・・・
「あ、お兄ちゃん！」
「ん？・・君は・・志穂ちゃん。志穂ちゃんも遊園地に来てたんだ。今帰るの？」
「うん」
元気になったな
「志穂、行きま・・・」
「・・こんにちわ」
「先日は本当にありがとうございました」
「いえいえ・・・」
「何かお礼をしたいのですが・・・」
この人もしつこいなぁ・・・
「とんでもありません・・見返りがほしくてしたわけではありませんから」
「そうですか・・・」
本気（マジ）でしつこかったぞ・・・

「志穂ちゃん、もう迷子になっちゃだめだよ」
「うん！バイバイ」
「バイバイ」
今度は手をつないでるな・・・
・・・いい母子(おやこ)だ・・・
「リュウ、今の子・・迷子だったの？」
「先日って言ってたから昨日の事？」
「あぁ・・昨日あの子を交番まで連れて行ったら母親がちょうどいてな・・・」
「よかったね・・・」
「あぁ・・・」
元気でよかった・・・
「・・じゃ、俺たちも帰ろうぜ」
「うん」

第十話　終わり

第十一話　スキー旅行初日

「もしもし？」
「おぅ、森堂」
「瑞嶋か・・なんか用か？」
「あぁ、明後日(あさって)から二泊三日でスキー行くんだけどさお前も行こうぜ」
スキーか・・・
「久しぶりだろ？」
「・・そうだな。俺も行くわ」
「あと綺香姉妹も誘うんだけど・・お前言っといて」
「わかった」
あいつらは・・・来る可能性は低いな
「あとは・・白河だけど・・・番号しらねぇな・・・」
「それなら槻嶋が知ってるんじゃねぇか？あいつら仲いいし」
「そうだな。じゃ！」
ブッ・・・ツー・・ツー・・ツー・・・
「二人呼びに行くか・・・」
俺が家の玄関に来たところで・・・
「リュウ君、こんにちわ」
「あ、出迎え付きだ」
「違う。たまたまだ。・・・ちょうどいいや今呼びに行こうとしてたんだ」
「何？」
二人を居間に座らせ
「さっきな瑞嶋から電話があって明後日から二泊三日でスキーに行くんだ」
「二泊三日でスキー！？」
「なんかやらしい・・・」

やらしいって・・・
「二人も誘ってたけどどうする？」
「・・・」
黙ってんじゃねぇよ・・・
「・・俺準備してくっからそれまでに考えとけよ」

一時間後・・・
「考えたか？」
「リュウ君遅かったね。そんなに準備かかったの？」
「いや・・準備自体は１５分くらいで終わったよ。ただその後寝ちまってな・・・」
「・・リュウ君ならありそうだね・・・」
・・・考えたのだろうか・・・
「・・あれ？雪紀は？」
「雪紀ちゃんは準備してくるって行っちゃった」
「・・・つまり行くのな・・・椛は？」
「私は用事があって・・・」
・・・桜さんと、か？
「そうか・・・わかった」
「ごめんね」
「別に謝らなくていいよ」
「ありがとう」
「龍輔君スキーに行くの？」
「あ、桜さん。はい、そうです」
「じゃあ、ちょっと待ってて」
そう言って桜さんは自室のほうに戻っていった
何取りにいったんだ？
「これ♪」
「・・・ネックレス・・？」
「うん。大事なお守り。スキーに行ってる間、絶対にはずしちゃだ

めだよ。約束」
「・・わかりました。約束します」

スキー旅行当日
「んー・・着いたな」
今昼だろ？・・結構早く着いたな
「大きぃ～♪」
「本当ね」
「きれ～ぃ」
うるせぇ・・・
「～♪」
・・・雪紀・・うれしそうだな・・・
「来てよかったか？」
「うん♪」

「フッ・・フッ・・フッ・・」
準備体操中・・・
「お待たせー。あ、龍輔君早～い」
「なんか久しぶりでな。ワクワクしてるんだ」
「なんか子供みたい」
「うっせぇ！」
でも本当にワクワクしてる・・・
「あ、龍輔君ネックレスしてる！」
「あ？あぁ、何だ。悪いか？」
「悪いわけじゃないけど・・・・・桜色で綺麗・・これちょっとつけてもいい？」
「だめだ」
「いいじゃねぇか。つけさしてやれよ」
そういって瑞嶋がネックレスを取ろうとした
「やめろ！！！これは絶対にはずさないと約束した物だ！！約束は

守る！！」
「わ、わかったよ・・・そんなキレなくてもいいだろ？」
「・・・悪い・・・言い過ぎた・・・」
「・・・俺も悪かったよ・・・」

「それじゃ。とりあえず皆のお手並みを拝見しよう」
そして
上級者、龍輔、雪紀、貴倉
中級者、白河、河野、瑞嶋
初級者、槻嶋、多岐澤
「じゃあ上級者が中級と初級を教える形で行くか」
「俺一人で滑りたいんだが・・・」
「俺はスノボ同士の瑞嶋のコーチをする」
シカト・・・
「えーーーー・・・」
「ほら行くぞ」
無理矢理連れてかれた・・・
「じゃ、じゃあどうやって分ける？」
「・・・どうでもいいんじゃねぇの？俺先行く。誰か二人ついて来い。コーチしてやっから」
「・・森堂君って普段からあぁなの？」
「まぁ・・大体・・・」
・・・一人で滑んのが一番楽しいんだがな・・・
「ほら！来んのか来ないのか！」
「美奈ちゃん教えてもらったら？」
「え・・でも・・・」
・・あーッ！イライラする！！
「勝手に選ぶぞ！槻嶋！白河！来い！！」
「あ、うん！」
「は、はい！」

・・・ったく
「・・なんであの二人を選んだのかな？」
「たぶん同じバンドのメンバーだから教えやすいんでしょ」
「そうだね♪じゃ、雪紀ちゃん。コーチお願い♪」
「あ、はい。わかりました」

「じゃあまず止まり方の練習な。やり方はわかるか？」
「ま、まぁ一応・・・」
「俺が最初に手本を見せるからその後俺が手を上げたら白河が先に来い。その後槻嶋な。二人の手本を見るんだ。失敗すんなよ？」
「う、うん」

それから約二時間後・・・
「おーい雪紀ー」
「あ、リュウ。ねぇ、多岐沢さんたち見なかった？どっかで見失っちゃって・・・」
「みんななら今ペンションで休憩してる。今日はもう滑らないって」
すっげぇぐったりしてたからな・・・
「そう・・わかった。じゃあ私たちも・・・」
「その前にさ。上級コース、行かねぇか？一緒に」
「・・・うん！行く！」

シャッ！
「ねぇもう一回行こ！」
「お前は元気のかたまりか？今下りて来たばっかりだぞ？」
「えへへ♪」
こいつは元気だな
ま、俺もこいつの明るいとこ好きだし・・・
こういうのもいいな♪

ペンションの男子部屋
バタン・・・
瑞嶋が入ってきた
「よお、どうだった？スキーは」
「その話は止してくれ・・・」
・・相当辛かったのか・・・嫌がらせばかりだったのか・・だな
「それより俺は大変な物を貴倉からもらった・・・」
「大変な物？」
貴倉からって事は相当頼み込んだな・・・
「それは・・・女湯の覗きスポットの地図だ！！」
・・・は？
「これは行くしかねぇだろ！行くぞ森堂！！」
「その前に！」
俺は瑞嶋の腕を掴んだ
「何だよ・・・」
「今日ここに来た女子、全員の名前を言ってみろ」
「え～と・・・槻嶋、白河、多岐沢、河野、そして綺香妹・・・！！」
「気づいたようだな・・・」
「ま、待て・・こ、これは・・・」
「俺の妹を覗こうとはいい度胸だ」
バキバキッ
「わ、悪かった！あ、謝る！だから許してくれ！」
「問答無用！」
どすッ・・・
「・・・・・・・・・」
「しばらくそこで反省してろ！」

そしてその夜
俺はホールでくつろいでいた

「あれ？龍輔君。何してるの？」
「ん？あぁ・・白河か。ちょっと休憩・・・」
「・・顔赤いよ？どうしたの？」
「さっきまで外走ってた」
「この寒い中？」
そうだってのに・・・
「おーい、そこのお二人さん。これからゲームをするんだ。男子部屋に集合」
「ゲーム？」
ゲームなんか持ってきたのか？

第十一話　終わり

第十二話　王様ゲームでドッキドキ！？

「ってゲームって・・王様ゲームかよ」
「あら、不満かしら？」
「合コンじゃねぇんだから・・・・」
しかもちょっと時代が古い・・・
「いいじゃねぇか。やろうぜ」
「一番不満なのは瑞嶋（こいつ）だ」
「あ？なんでだよ」
「お前の事だ。どうせ変なことでもさせるんだろ？それが不満なんだ」
「そ、そんな事ねぇよ！」
どうだか・・・
「ま、まぁいいじゃない。物は試し。じゃ、やりましょ」
勝手に・・・
「みんな引いた？王様だ～れ」
「俺だな」
貴倉か・・・
まともな事だといいが・・・
「そうだな・・・・・よし！では・・七番が三番をビンタ！」
「ん・・七番は俺だ」
「え！？」
・・・なんかいやな空気・・・
俺結構思いっきり殴るからな・・・
相手が女子じゃなけりゃいいけど・・・
「三番は誰？」
「・・俺・・・・」
瑞嶋か・・・
「瑞嶋君か・・ちょっとかわいそう・・・」

俺そんなにひどいか！？
「不運ね。龍輔君は男には容赦ないわよ」
「ビンタじゃないとだめなのか？」
「何でもかまわん」
「そうか・・・」
ならどうすっかな
「いくぞ・・・ぉらッ！」
「くッ・・ふん！お前の左ストレートは俺でも防げる！」
「まだ右が残ってるぞ！」
バシッ！
「イッテー・・・・・だが何とか押さえたぜ」
「甘いな」
「！？」
ガシッ！
俺は瑞嶋の腕を掴んだ
「今のはお前を捉(とら)えるための罠！そしてお前は罠に掛かった」
「何！？」
「喰らえ！」
頭突き！
「がッ・・・」
「・・・へッ！」
「あらら・・・」
「ほんと、男の子には容赦ないわね」
・・・そうかな・・・
「リュウ大丈夫？」
「あぁ。俺は・・・」
「イッテーーーーーッ！！！死ぬかと思った！！石頭で頭突きはやめてくれ！！」
「悪いな」
頭から微妙に血が出てる・・・？

「じゃ次だ」
「あ、私王様！」
「美奈ちゃんが王様？」
「どんな命令をするんだろう・・・」
「命令ってちょっとひどい！」
・・ま、槻嶋なら特に変な事は言わないだろ
「じゃあね・・・・・六番が一番の肩をもむ」
「もむって言い方・・・」
「違う事を言いたかったんじゃない？」
「む！ひどいよ！」
やばいか・・・な？
「ま、まぁとりあえず六番と一番の人誰？」

「あ～・・極楽だな・・・」
「龍輔君おじいさんみたい」
「じゃあ恵美は孫か？」
「あはは♪それ面白い♪」
つまり六番は俺で一番は恵美だった
「龍輔君どう？」
なんか気持ちよくなってきた・・・
「あぁ、ちょうど・・いい・・ぞ・・・ＺＺＺ」
「・・龍輔君？どうしたの？」
「寝てますね・・・」
「え？・・・ん～・・・・あとどれくらい？」
「あ、じゃ、じゃあもういいよ。龍輔、起こそ」
「・・龍輔君・・龍輔君！」
・・・うるせぇ・・・
揺らすな・・・
「ＺＺＺ」
「・・・リュウ。夜ご飯まだ？」

「・・・今作る・・って今ペンションだぞ！？」
「おぉ・・起きた」
「あ？何だ？」
俺寝てたか？
「なるほど森堂を起こすには軽いうそを言えばいいのか？」
「俺は私生活の事なら言われればすぐ起きる・・と言われた事がある」
「つまり・・学校に遅れるぞ、とかって言えば起きるのか」
「はい。そうです」
「いい秘訣を聞いたわ」
・・・言っちまった・・・
「じゃ次」
「次は私ね」
河野か・・・
「そうね・・・じゃあ・・」
なんかいやな予感がするんだよな・・・
「二番が五番に・・・抱き付く」
「何！？・・俺どっちも違う～！」
瑞嶋はすげぇ落ち込んでるな・・・
「・・えっと俺は・・・はぁ・・・」
何でこういう時に・・・
「俺、二番」
あたるんだろうか・・・
てか全部あたってる・・・
「え！？五番は！？」
「・・わ、私・・・」
槻嶋か・・・
ま、誰にしても・・・
「俺こういうの嫌なんだが・・・しなきゃだめか？」
「もちろんよ。王様の言う事は絶対なんだから」

「はぁ・・わかったよ・・・」
やりゃいいんだろ？やりゃ・・・
「じゃ・・悪い」
ぎゅ・・・
「・・・・・・・・・」
・・・ドキドキしてやがる・・・俺・・・
「・・・もういいか？」
「だめよ。あと３０秒」
「ずりぃぞ森堂！」
「うるせぇ！俺だってしたくてしてんじゃねぇ！！」
「・・・ま、まだ～？」
槻嶋も早く終わらせてほしいようだな
「わかったわ。もういいわよ」
はぁ・・やっとか
「じゃ、次♪」
「・・・俺」
「森堂か・・・」
考えんのめんどいなぁ・・・
「森堂！王様ゲームらしいのを頼む！」
瑞嶋（こいつ）は・・・
「じゃあ・・・二番が七番の頬にキス」
「それだよそれ！俺は・・よっしゃー！七番！！」
・・・やばい奴にあたったな・・・
「二番は？」
「・・私・・・」
また槻嶋か・・・
「よし！槻嶋！頼む！」
「その前に瑞嶋。どこにキスしてもらうんだっけ？」
「唇（ここ）！」
即答・・・

「そうかそうか。お前にはそう聞こえたか」
「あぁ！」
「言い忘れてたが一つルールな。・・王様(おれ)に逆らったらそれ相応(そうおう)の罰を与える。お前の場合そうだな・・半殺しは絶対だ。・・・で、もう一回聞くがどこにキスされるんだっけ？」
「・・頬(ここ)にです・・・」
「よろしい」
でもまぁ・・・
「な、何すんだ！」
俺は瑞嶋の頭を掴んだ
「お前はやはり危ない。だから頭を動かせねぇようにしただけだ。今だ槻嶋」
「あ、うん」
チュ・・・
「はい終わった」
「えーッ！もう？」
「半殺しされたいか？」
「結構です」
即答・・・
「あ、そうだ。今のはもう無しな。瑞嶋が乱用しそうだから先に言っとく」
「えーーーッ！」
「半殺し・・・」
「じゃあ次しようぜ！」
瑞嶋(こいつ)は・・・
「私王様♪」
恵美か・・・
「じゃあね・・・三番が五番をお姫様抱っこしてペンションを散歩」
言うの長ぇ・・・
「三番と五番誰？」

「私五番です」
「三番俺だ」
「ちょうど兄妹(きょうだい)で・・・」
・・・お姫様抱っこって・・・
「よっと・・・じゃ行ってくる」
「好きな時間に戻ってきてね♪」
「わかった」
バタン・・・
「いいなぁ森堂ばっかり・・・」

「リュウってやっぱ力持ちだね」
「と言うよりお前軽い」
「・・・・・」
なぜそこで黙る・・・
「なんか持ちなれねぇ・・・よっ！」
「え！？持ち直し！？」
フニ・・・
・・・この感触・・・
「・・・わ、悪い・・・」
「・・・リュウのエッチ・・・」
「・・・悪いって・・・」
「・・・お姉ちゃんには黙っててあげる」
「・・・ありがと」
・・・・・なんか・・なぁ・・・

「もうそろそろ戻るか？結構長く散歩してるし」
「・・ね、ねぇ。外行こうよ」
「あの軽い吹雪の中にか？」
「だ、だめだよね・・・」
・・・行きたいのか？

「お前が行きたいのなら行くけど・・風邪ひいても知らねぇぞ？」
「う、うん・・・」
・・と言う事で外に出る事にした
「やっぱ少し寒いな」
「・・・」
なんか様子がおかしい・・・
「？・・お前寒くないのか？」
「さ、寒い・・・」
「ならなんで抱きつかん。いつものお前ならすぐ抱きつくと思うが？」
「だ、抱きつくな！っていつも言ってるじゃん・・・」
あぁ・・そう言えば
言ってたな
「まぁ今回は状況が違うから別にいいぞ？」
「い、いいの？」
「あぁ。今の状況だと俺はずっと中を歩いていたから多少体温が上がってる。でもお前は多少寒い中ずっとじっとしてるから多少体温は下がってるはずだ。それなら体温の高い俺に抱きついてる方が風邪をひく確率が低くなる」
「・・じゃ、じゃあ抱きつくよ？」
「あぁ」
ギュ・・・
「・・どうだ？」
「・・・うん。さっきより温かい」
ギュウッ・・・
・・はずい・・・
「ょぅただいま」
「あ、戻ってきた。どうだった？」
「ま、楽しかったな」

「それだけー？」
俺に何を求める・・・
「ところで、瑞嶋はなぜこんなに・・落ち込んでるんだ？」
「瑞嶋君一度も王様になってなくてしかも」
「俺が王になった時は女子からのビンタが炸裂したんだ」
「なるほど・・・」
瑞嶋なら相当落ち込むだろうな
「森堂・・お前はいいよな・・・お前はいつも・・・」
何だろう・・すごく・・むかつくような気が・・・
「お前黙れ。急所に蹴り入れるぞ」
「はい」
ったく
「じゃ、じゃあ次やりましょうか」
「ふっ。またしても俺か」
貴倉・・・またって事はさっきもだったんだろうな
「では・・四番が二番に命令をする」
「貴倉君またぁ？」
「ふふふ・・これはこれで面白いではないか」
・・・完璧に楽しんでる・・・
「四番と二番誰？」
「・・・二番、俺」
「！！よ、四番は！？」
なんか急にあわててる！？
「私四番です」
「またしても兄妹・・・」
またか・・・
「俺が雪紀の言う事を聞くのか？・・・はぁ・・・」
「何でため息つくの？」
「・・頼むからマシなのにしてくれよ？」
「・・うーん・・どうしよっかなぁ」

こいつ楽しんでる
「・・・決めた」
「何、何？」
「今日は大目に見てペンションを十周ダッシュ」
・・・・なんだ
よかった
「雪紀ちゃん。龍君は十周じゃ汗流すくらいしか疲れないの」
「何せ１００メートルを十秒以内で走るからな」
「え！？」
「こいつは全く平気だ」
「・・・じゃ、じゃあ百周！！」
百周か・・・
「それはやりすぎじゃ・・・」
「・・・いいだろう」
「龍君！？」
このペンションは一周が約１３０メートルだから
合計が約１３００メートルか・・・
「・・三分以内には戻ってこよう」
「！？」
「じゃあ計ってるからね」
「あぁ」
「よーい、ドン！」
ダッ！
バダン！
「は、速い・・・」
「・・・じゃ、森堂が戻ってくるまで続きするか」
「うん。雪紀ちゃんは？」
「今、計ってますので」
「あ、そうだったね」

「雪の中走るって気持ちいい！！」
滑らないといいけど・・・

「・・あと十秒、九、八、な・・・・」
「だーーーーッ！！」
「おぉ！二分五十三秒」
残り七秒か・・・
危ねぇ
「ッつーーッ・・・・」
「どうしたの？頭を押さえて」
「走ってる途中で思いっきり滑って頭が木に思いっきりぶつかった」
あれは勢いがすごかったからな・・・
「大丈夫？」
「・・まぁ、何とかな」
「じゃ、龍輔君が帰ってきた事だし」
「次、やろ♪」
絶対待ってなかったな・・・
・・・知らんけど
「・・・俺か・・・・」
「龍輔君かぁ・・・・」
「森堂！！何か・・頼む！！」
頼まれても・・・
どうしようかな・・・
「じゃあ・・二番と六番がじゃんけん三回勝負をする」
「じゃ、じゃんけんって・・・・」
「まだあるぞ。負けた方は全員分の飲み物を自腹で買う」
「全員分！？」
やかましい・・・
「合計約１０００円だ。で、二番と六番は？」
「・・二番は俺」

二番、瑞嶋
「六番私・・・」
六番、槻嶋
「じゃあ、強制的に瑞嶋。買って来い」
「何でだよ！！」
「女子に買わせたいってのか？」
「そ、そうじゃねぇけど・・・やってみなきゃわからねぇだろ！」
「じゃ、やってみろ」
一回戦
「じゃん、けん、ぽん！」
瑞嶋パー
槻嶋チョキ
二回戦
「じゃん、けん、ぽん！」
瑞嶋グー
木島チョキ
「これで二対二だ」
ラスト
「じゃん、けん、ぽん！」
瑞嶋チョキ
槻嶋グー
「ぁ・・・・・」
「ほらな。買って来い、瑞嶋」
「・・うぃ・・・」
「私ココアね！」
「あ、私も！」
「私もよ」
「私のも」
「私もお願いします」
「俺はミルクティだ」

みんな頼むなぁ・・・
「俺はコーヒーだな」
「・・・女子は全員ココアで、高倉はミルクティ、森堂はコーヒー・・・わかりましたよ」

「おまちどうさまです」
「ん、ありがとう」
「瑞嶋君、今度は王様だよ」
「何!?」
ダッ!
速い・・・
「おぉ!よっしゃーーッ!!」
「で?どうするんだ」
「そうだな・・・・よし、決めたぞ。四番が王様の言う事を何でも聞く!!」
「・・王でも変な事したら殴り飛ばすからな」
「!!・・・わかってるよ」
ったく・・・
「四番誰?」
「・・・俺だった」
「森堂か!今十時だろ?じゃあな・・・」
いやな予感
「・・外で一時間じっとしてろ!」
「み、瑞嶋君!!」
「それ拷問(ごうもん)だよ!!」
「龍輔君、やめといたほうがいいよ」
・・なぜ?・・・
「・・・じっとしてればいいんだろ?そんなの・・なんて事ねぇよ」
「へ?」
「ただ・・・お前はどうだ?」

「！！」
「お前はこの雪山の中一時間もじっとしていられるのか？」
「・・へ、へん！やってやらぁ！」
ニィ・・・
「言ったな？俺が戻ってきたら今度はお前が出ろよ」
「あぁ！」
バタン

「・・さて・・・・ｚｚｚ・・・・」
一時間経過
「・・・フ、ファー・・・・ん？もうそろそろか？」
・・・・眠い・・・・
「よぉ・・・・」
「りゅ、リュウ！！」
「大丈夫？龍輔！」
「早く乾かして！風邪ひいちゃう！」
・・早速（さっそく）面倒だ・・・・
「大丈夫だから」
「で、でも・・・・」
・・・・・・
「大丈夫」
「本当？」
「あぁ」
「・・わかった」
ふぅ・・・
「龍輔君。どうやって一時間も耐えてたの？」
「ん？あぁ・・寝てた」
「寝てた！？よく死ななかったなこの寒い中・・・・」
寒い中って・・・・
「何言ってんだよ」

「へ？」
「次、お前が外に行く番だ」
「・・い、行くのか？」
「あぁ」
絶対に
「で、でもそんな事言った覚えないなぁ・・・」
「ここにいたみんなが聞いたぞ」
「うん。聞いた。言ってた」
「・・わかったよ・・・」

一時間経過
「た、たたたた、ただ、いま・・・」
「・・・ストーブはそっちだ。温まっとけ」
「あ・・あぁ・・・」

「・・・そろそろ一時だな」
「もう寝ようか」
「そうだね。じゃあおやすみ」
「あぁ。おやすみ」
女子は皆部屋を出た
「じゃ、おやすみ」
「おやすみ・・・」

第十二話　終わり

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1455f/

別れのKiss -そして再び-

2010年10月18日20時09分発行